

苜萱桑門筑紫轢

作者

並木宗輔
並木丈輔

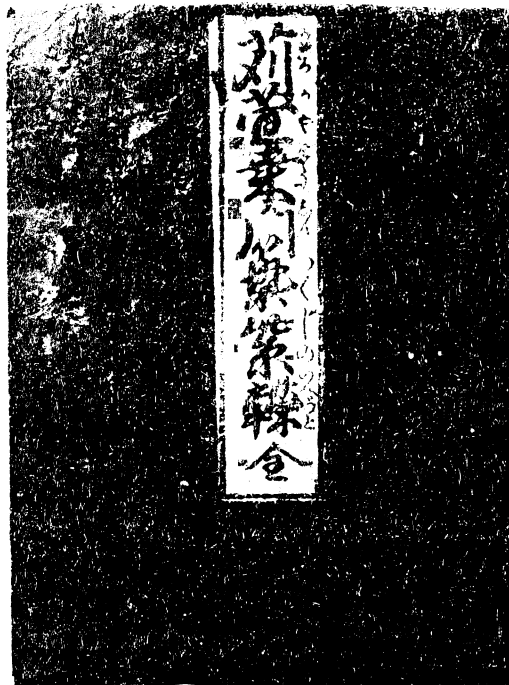
片道大造殿に仁義起り。國家亂れて忠臣を顯す。此語を以て鑑みれば。道にも亦誠の本あり。其誠の源を尋ねれば。戀慕愛執に如くはなしと。豊葦原の陰神陽神。探り給ひし天の逆鋒。種擴りし世々の祀。御小松の院の御治世。従ひ靡く君子國オロシへ時めく春の。榮なり。猶當今未だ御幼稚なれば。御母通陽門院殿。暫く寶祚を預り給ひ。踏歌の節會を御行事。禁庭守護の武士は。筑前の國の住人。加藤左衛門尉繁氏。宵より詰めて宿直守。假に授かる官職に。在京の其間右大將の烏帽子狩衣。華やかなりし出立も衛士が焚く火に光添へ。威あつて。

猛く見えにけり。地色夜半も次第に更過ぎて。明方近き星の影衛士は篝を焚きさして。都芳門に立出づれば。オウ代るへ時刻と入替り。出で来る衛士は。奥女中。御國母の召使千鳥といへる品者が。長袖すつきりとした下げ髪に似合はぬ烏帽子装束も。派手な風俗柳腰。男欲しがる曲者とは。目許の。愛に知られたり。繁氏卿の後に立ちどうやら何ぞ言ひたげに。うぢ／＼すれば振返り。是ははしたり千鳥御前風流なお姿。扱は今宵の篝火は其許がお勧めか。ハテしやれた衛士。焚いて貰ふ籌めは果報なやつと挨拶の。中にもちつくり色持たす。フシやれば物師の

しるしなり。地色千鳥の前は先取られ何と答も恥かしく。顔を赫めて居たりしが。てんぼの皮と御手を取り。七歳餘りの御在京御参内の度毎に羣衆の隙より垣間見て。ひよつと燃えつく戀の篝火。思ひの煙えぬ故露程なりと此心を。申上げ度き願ひにて形を變ず衛士の役。胸の焚く火に焦がれ死ぬ。命を助け給はれと御弱腰に。抱きつく。色もとり好む色男子。否にはあらぬいな船の。漂ふ心を押鎮め。志は過分ながら。禁中在番の某。御所の女中に不義ありなどと。風聞あつては後日の難儀。折もあらんと言捨て。振切り給ふをそりやならぬ。はもじい事のありたけを。言はして置いて厩怒な。お上の事は公なれば。こんな詮議はござんせぬ。よしお咎めがあるならば。罪を私が一人して請けませう。其段には氣遣ひなくどうなとせうと

ついで一口。嬉しいお詞聞かせてたべ。さうなければ何ぼでも。フシ放しやせぬと取付くを。『イヤ〜それは勝手了簡。高呑込みで請合はれぬ。』猶も赦し給へと振放し。あなたこなたへ外しても。猶も放れず附纏ふ折もこそあれ御殿を卷上げ。御母通陽門院。關白良基公を始とし公卿を伴ひ出で給へば。二人は庭に敗亡の逃げもやられず平伏は。『シあやまり。入りし風情なり。』國母御聲麗しく。苦しからず遠慮なせそ。深くも思ひ染めたりし色をば如何でさますべき。『コレ〜繁氏。國に妻子を残し置き枕の伽も七歳餘り。』地懶怠なき勤番の褒美に千鳥を取らすべし。淋しき閨の友とせよ。『その往昔近衛の院。源三位頼政に下されしは。池の眞菰に水増して引きぞ煩ふ葛蒲の前。』地それには引替へ戀風に。吹立てられし浪の上鳴き騒いだる千鳥ぞや。永く

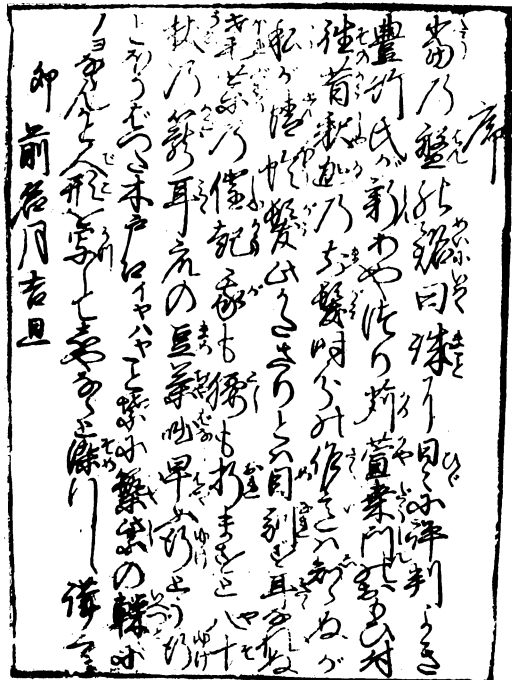
比翼の友羽交打交せよと宜旨あれば。コハ有難しと繁氏卿。千鳥は猶も悦びの。胸落着けど心はせき。『又もや御意の變らぬ内。私はお屋敷へお先へ參つて待ちませう。』地色お前は跡から御歸館と。早しこなせし妻氣質。『しいそ〜立つて入りにけり。』地折から知らず朝風。人の面も白々と。『明渡へりたるフシ四方の空。』



棟紫筑門桑菫町

御番の代りと聲かけて。『堂前の大領大
内之助義弘が舊臣、多々羅新河左衛門秀
賈。白髪まじりの曲者階下間近く額を
下げ。』『今日守護の勤番は。主人大内義
弘が役目の所。此間より所勞に依つて某
が名代。御赦免仰ぎ奉ると奏すれば繁
氏立寄り。』『病氣とあれば餘儀なき仕合
せ。天子にも勅許あるべし。』『堂イザ役目
を譲り代らんと立出でんと、』『し給ふ所
へ。』『堂執権蓋物太郎信俊。奏聞の事あり
と訴へ出でて庭上に畏り。』『扱も高雄の
御山は觀音薩埵の靈験あつく。諸人の信
心日々にいや増し。歩みを運ぶ靈地なる
に。十日許り以前より身に香染の袈裟を
かけ。荊棘の髪ふり亂し。高足駄にて異
形の行人。夜は洞穴に取籠り。晝は山を
徘徊して。往來を惱ます由昨夜陰に及び
ての注進。』『如何計ひ申さんと申上ぐ
れば。關白良基公劔取直し。』『出家なら

ば佛意を慕ひ。難行苦行に身を凝らし。
道を試す數もあり。有髮の行者は心得ず。
殊に往來を惱ます由。何にもせよ聞捨
てになり難し。』『帝都の騒ぎにならざる
様。汝密かに行向ひ。都の内を追拂ふか。
異議に及ばは召捕つて糺明せよと。仰せ
の内に承ると立つ所を。新河左衛門暫
しと呼びとめ御前に向ひ。』『夜前迄は彼



が主繁氏の勤番。今朝よりは手前の主人。大内義弘が役目。此討手某めに仰せ付けられ下されと。願へばやがて監物太郎イヤこれ新洞殿。高雄山は北嵯峨に相續き。主君繁氏が預り場所。其上拙者が承つた役目。横間より手前へとは。我儘至極と。言はせも立てずヤア武の道から武を望むを我儘とは舌長し。是非この討手は某にと。いひ捨て立つてどこへどこへ。人の役目をよい年して。かち落さうとは大人氣なし。類似合うたやうに圓座の上。髪を數へて居召されと。詞あらしめて駈行くを走りかゝつてしつかと捉へ。兩年は寄つても此親爺。まだ腕先には覺えがある。行かろうならば往て見よと。引止めたる力瘤。エ、面倒なる老望めと。挽放せば擱付く。待てよくと關白の仰せも聞かず繁氏の。詞も餘所に監物太郎一ふり振つて振放し。飛ぶが



如くに駈出すを。奈落までもと新洞左衛門。辭儀も作法も白砂を。踏散らしてぞ追うて行く。通陽門院寂感あり。大内には歌争ひ武士は武を争ふ。其家々の習ひとて勇ましき有様かな。勇む心に迎ひを待たず。嫁入急ぎし千鳥の前さぞ館にて待兼ねん。宿の塙を撥めて友鳴きにせよ繁氏と。御縛を立ち給ふ御戯れは常

陸帯。結ぶ契りは。千代八千代。かはらぬ。國の。三風へ春風も。フシ匂ひを含む。

一霞。都は辰巳高雄山峯は斜の白雲に。巖登えて茫茫たる。雲もとけ行く谷川の。ヌエ苔滑かに松の聲。げに物凄き。フシ景色なり。

被衣に隣り若草の素足で拾ふ御所女中。ホシ男交りにざゝめくは。

千鳥御前のお乗物繁氏卿のお館へ。押付けて行く嫁入分道を通つて観音詣で。

結ぶ誓ひの鐘の緒に縁も長き山坂を。息休めにとお乗物フシ松の。木蔭に立てければ。

地もけふぞ雲井の肩とけて立出で給ふ千鳥の前。花を隈取る御姿。袂吹返す戀風も。

憂きとや人は羨まし。地も腰元どもはざわくと駕籠を放れし里雀。中にも梢が囁りて。

河と皆の衆。小面の惜い此松に。抱付いた藤わいの。丁度あの様に千鳥様も。繁氏様にしがみ付いてござらうの。

地あんな許量のよい殿御御心。今迄は御所住居やめめ鳥の千鳥様。

果報なあやかり者と。なぶりかゝれば礎が差出で。そりや知れた事云やるがく

だ。したがどうも呑込まぬは彼方のお

観音参りが心得ぬ。お持たせ振の道草かと尋ねれば打笑み給ひ。様子知らねば



飛立つ程に思召し。一寸でも早うお屋敷へござる筈。地それに氣疎い廻りして。

観音参りが心得ぬ。お持たせ振の道草かと尋ねれば打笑み給ひ。様子知らねば

さう思ふも道理。言ひ出すも恥かしい。

更の事ならず。とうから惚れて居るわいの。おお國には石動君とて。若殿まである御臺様。歴平としてござるとは知りながら。思ひためては忘れず焚付けて見る衛士の篝火。姿をくろむ濡衣つい門院様に見付けられ。はつと心に思ひの外。お氣の通つた粹な勅諭。是といふも自らが年月余する心の誠。偏に觀音様の御利生と思ふから。道寄りしてのお禮参り。恥かしとばかりにて。御乗物に召し給へば。それならば御尤もいよ〜大悲のお力で。いちむちのない様に晚からは念彼のだん。段々によい戀枕うん〜雲雷鼓撃電。雷に脚を取られぬ内。急ぎや〜と我一に。行きかゝりたる。向ふより。悪者作の深編笠。供先押割り。のつさのさ。ちと乗物へ御訴

訟と。のさばりながら立寄れば家來の者ども聲々に。願ひ訴訟の事ならばなぞ記録所へ往てぬかさぬ。へレ狼狽たる浪人と。嘲笑へどちつとも怯まず。汝等が知つた事でなしと。押除けて乗物の傍近く。コリヤ妹。見ぬ顔するは手が悪い。兄黒塚の鬼藏人見忘れはしよまいがな。最前から様子を聞けば。そちは今日繁氏殿へ嫁入をするとの話。それなれば無心がある。某をお館へ連行き。私が兄でござる。お取立て頼みますとたつた一口詞を添へなば。義理にでも繁氏殿世話しやらねばならぬ事。さすれば兄が身にありつく。兎角いへば思案があると。妹に向ひ居合腰刀ひねくり嚇せしは。

鳥の前乗物の戸を押明けて。珍らしや藏人殿。まだ息災で此世にござるか。へエ、こなたは。いふに及ばぬ事なれど

も。父上黒塚群寮様は。代々續く禁裡の博士。君の覺えも目出度き家柄。男の子とては其許お一人。跡目も相續する身を以て。十年前清涼殿のお能の時。醉狂の上人を過ち。直ぐにそれよりお前は墮落。其お咎めにて父上は浪人し給ひ貧しき世渡り。性故に家を潰し。先祖へ對して言譯なし。必ず何處で出逢うても。兄と思はゞ共に勘當と。御遺言にて貧家の死をば。なされたぞや。それ今更妹よ千鳥よとは。どの顔下げて對面ぞと。恥しめられてさしもの悪者。俯向いて詞なく。砂にの字を書きむたり。千鳥の前は涙を押へ。ア、恨むまじ返らぬ事。皆の衆の手前も思はず。よしなき昔の長話。日もたけて嘸やさぞ繁氏様にもお待兼ね。心せかれと宣へば。そりやお急ぎよと六尺ども腰を振出す五枚肩。行く乗物の捧しつかと捉

へ。アイヤ妹さううまうは抜けさせぬ。
いづく迄も同道と。堀ねけけかゝれば家
來の者ども目をむき出し。聞いた様子
が大泥坊。兄貴でも大事な。性根の
直る意見の爲。目に物見せんと立ちかゝ
り。遠慮會釋もなま木の息杖。足腰か
けて用捨なく連枷投げに打ちのめし。厄
介な繩くらひ。棒をくらふとよい氣味か
とどつと、笑うて行過ぎる。藏人ヤ
うく起上り脊骨を擦り齒がみをなし。
へエ、罰當りの妹め。此分で済まさうか
と駆出す後の方。暫しくと止むる行
相。紅の衣を身に纏ひ亂鬘逆に生ひ茂
り。一丈餘りの桂の杖。高足駄踏みならし
悠々と立出づる。さしもの藏人肝を消し
暫し。詞もなかりけり。ホ、自馴れ
ぬ姿不審顔は尤もく。我この程より大
願の仔細あつて。當山に分け入り身を凝
らせど。胎金兩部の峯も慕はず。赤木の

珠數を押揉んでは。四海を胸に懸む妙
術。汝妹が縁を頼みに。繁氏に仕へんと
は廻り遠き分別。某が幕下に付かば高
祿を得せしめ。先途を見届け取らすべし
と。さも横柄なる詞つき。何がな搔き
付く猿智慧の押直つて頭を下げ。何が
さてく。落着く嶋もない某。いか様と
もお眼識に預りたしと手をつけば。頼
ヲ頼もしく。いでく汝が高祿出世
の手がよりとなる判じ物。よく判じよと
歩み寄り。松にからみし藤かづら。若葉
は爰ぞと杖取りのべて。ちやうくく
と二枝三枝。確落しては見よや。元來加
藤は藤原氏。其藤をまつ此如く切放す。
早く此心を祭せよと。いふに角ぐむ鬼藏
人。額の皺に智慧かき寄せ。ム、ム、
ム、近年の謎したりく。其藤原の藤の
枝を切捨て給ふは此藏人に。繁氏が首ア
ア聲高し密かにく。すりや判じたる心

底は。成程討つ氣でござれども。未だ君
の御名を明かされねば。地色あつとは得
こそ申すまじ先づ姓名をお聞かせと。い
ふに領さホ、うい奴出來いたく。かく
胸中を見据えし上は何か包まん。某もと
某當山に住む者ならず。九州に隠れなき
大内の助義弘といふ者。そも此山に艱苦
する事。我多年天下を望み。日夜朝暮大
支谷神の呪を唱へ。又は諸國の安否を窺
ひ。國家を握る。企なれども。合點の行
かぬは繁氏一人助け置いては失望の妨げ
と。地語る半ばへ轡の音程近く聞ゆれば。
奇異の思ひを大内の助眼をくばりヤアラ
心許なし。暫しが内我は窟に身を隠さ
ん。汝も暫し忍べよと言含めつ。引
別れオチり茂りのへ内へ入りにける。五月
夕日に背けて向ふ高雄山勇みの鈴も華や
かに馬上ゆしく乗りたるは。ナホス地監
物太郎信俊身は腹巻に小手鷹當。暫時に

駈ける浦文馬。鞍に引添ふ譜代の郎黨。
 大佛新藏諸侍。息をはかりに。駈來る
 所へ。遙かに下つてオ、イ、オイと呼
 びかける。心せけども監物太郎何事やら
 んと手綱かいくり。駒を返せば新洞左衛
 門頭に星菊降り積れど。身體は忠義の章
 駈天走り徒立ちになつて駈着け。ヤヤ
 曲もなや監物太郎。朝廷にても争ひし今
 日の討手。是非某にふり代り。其方密に
 歸つてくれ。頼むといふ間を待兼
 ね。ヤア心得ぬ御邊が胸中。さまでの
 討手にもあらざるに息筋張つての所望。
 但し其曲者に由縁あるや。心底明かさば
 品により了簡もあるべきが。無體の望み
 訝しく。ホ、ウそれも尤も。何を隠さ
 う閑居して。異相に見ゆる行人は。我主君
 大内の助義弘殿。ヲ、驚きはさこそさこ
 そ。かく打明ける上からは爰が五の了
 簡づく。いふを打消し聲荒らげ。



う聞いては猶許されぬ。禁裡表は所勞と
 偽り。此山に隠れ住んで。何の爲の難行
 苦行。それを明かさば兎も角も。サア
 其様子は仔細はと。問詰められてイヤ其
 儀は。其事はと。差詰つたる返答にヤア
 狼狽へたる一言。家來として主の心推
 察せず仕へるか。善ならば善。悪なら
 ばなせ諫言は加へぬぞ。不覺者と云捨

てに引直す轡面。押取つて引きとどめヲ
 ヲ尤もなり監物太郎。汝が主の繁氏殿
 とは事かはり。主君大内は古今の猛將。
 思ひ込んだる初一念中々家來の諫めも聞
 かず。存じ付いたる大願ありと。仔細言
 はすの山籠り。禁廷へは所勞の言立て。
 萬一此事顯れては上を掠むる大罪。大内
 の家の滅亡。さるに依つて某が無體に
 討手の役目を願ふ。主持つた身は相互。
 一生覚えぬ此親爺が。手をさげる間分け
 よと。いへども聞かすいや〜。洞
 穴に壇を築き不及の望なす者多し。假初
 ならぬ勅命を請け。善とも惡とも仔細を
 聞かず。私に了簡する事ならぬ〜。コ
 リヤ大佛。無益に時刻も押移る。構はず
 とも皆引連れ山の手をおつ取巻き。大
 内之助を逃がすなと下知に従ひ供廻り。
 フシ一度に勇み入りにける。地色元より短
 慮の新洞左衛門。無念や思ひけん。



ヤア奇怪なり監物太郎。六十に餘る某
 に。様々の口叩かせ。其上主君と名を明
 かさせ。無得心なる人畜生。いつ迄も
 動かせじと。乗つたる馬の尾筒をおつ取
 り引展せば。又馬上には障泥を打ち。ハ
 イ〜と乗出す。互の忠義に精
 氣をもみ。心は逸れど老の腕。次第にゆ
 るむ疲れを見込み。大佛と監物は

すみにあふり。丁ど當つれば跳上ぐる。馬の蹴上げに新洞左衛門跳倒されて反る所を。障泥と鞭を打重ねく。馬を飛ばして一散に。フ奥山指して駈り行く。新洞怒りの齒を噛みしめ。忠義に固まる老の兩足。踏固め踏みしめて追つかけ行く一筋道。通りかゝりし銃乗物。向ふ見すの新洞左衛門。供先おし割り駈行くをつきんくの侍立寒がり。不作法なる老。此乗物に召したるは悉くも禁中より。繁氏卿へ御入りある千鳥の前。片寄れ。フ下れと罵つたり。新洞左衛門心附き是こそ監物めに。ほ手合させる質物と。乗物の棒しつかと捉へ。ハレよい所へ千鳥の前。乗物を踏碎き駈通るは易けれども。こつちに少し入用な。元の所へ昇き戻せ。宰領は此親爺と力に任せこりやく。エイくくと突戻せば。地色眞青に腰元ども足もよろ／＼六

尺も。降つて湧いたる災難もすべきやうなく理不盡に。深山をさして押しほす。地も暫らくあつて山の頂。義弘が籠りたる洞の邊をうそくと。尋ね廻りし若侍烟冠にて顔隠し。空乗物をこなたに吊らせ巖の前に禮儀正しく。イカニ我が君義弘卿。今日禁庭の風聞。當山に於て隠任の族。急ぎ誅せよとの勅諭にて。則ち討手向ふの評定。此儀密かに達せよと。主人新洞左衛門が注進によつて。則ち家來岩淵平馬御迎ひに參上と。似つこらしげに呼ばはれば。洞の扉を押開き。義弘は寛々とさあらぬ體にて歩出で。なかに新洞が家來迎ひに來りしとな。大義を起す某。小事の害を待たんより一先づ此場を通れんと。乗物引寄せ飛移れば。仕済ましたりと鐵の大綱。双方より打着すれば。監物太郎駈來り大聲上げ。ヤア／＼大内。武士の山籠り不

審を晴らせの勅命にて。加藤左衛門繁氏が家來監物太郎向うたり。地言譯あらば天奏にて申開かれよといふ聲を。聞くよりも大内の助五體を搖る唸り聲。ヤアヤア黒塚は居り合はぬか。藏人は出合はぬかと。乗物兩手にめりくぐわたぐわた。一人前の大地震うめく。御に鬼藏人。尻引つからげ飛來り。有無をいはずに無二無三斬つてかゝれば大佛新藏。丁ど受けて受流し。眞向御座と斬りかくれば。コハ叶はじと鬼藏人。フははふ逃げて失せにけり。地色かゝる折しも岩蔭より。新洞左衛門秀貫が迫立來る銃乗物。ココリヤ／＼監物。推量が其乗物某が主君大内殿よな。さこそと知つてこつちもぬからぬ。此奪取りし乗物は汝が主人繁氏へ。禁中より下されし千鳥の前。奪取つたは汝へ面當。主君大内を戻せばよし。さもなくば恨みの又此乗物へ

突通すいかに〜と聲かけたり。南無三寶と監物太郎。コリヤ新洞。勅命下りし千鳥の前殺さば汝敬敢同然。ヤア主を擒になすからは破れかぶれ。サア返答はと刃の影ヤレ待てせくな。左程忠義を立てる根性。無下にするも本意ならず。殊に主君の寵愛殺さるゝも残念。地理を非に曲げて乗物ぐるめ打換へて得させんさりながら。勅命請けて生捕つたる曲者。私に助けては朝家の聞えも恐れあり。此儀にあぐむと言はせも立てず。ヤレそれは一途。高雄山の異行人おつ拂へとは最初の勅。生捕れとは異議に及ぶ時の事と。いふに領きそれよそれよ。いざ乗物を表立ち渡してくれう安堵せよと。家來に言付け昇上げさせ。こりや〜新洞確に聞け。洛中洛外。追放の行人網きせて渡すぞと。いふに喜び尤も〜また。幾千代の友白髮祝ふ

嫁御の色直し。雲井の薫。蘭麝の乗物。双方一度に取換し。損徳なしの山道を分けて信俊。秀貫が肩も揃うてエイサツサ。誘ふ嵐の入相は。かねて思ひの羽を伸し。濡るゝ鷺鷥。妹脊鳥これは遁れぬ網鳥や。網代のうきに大内之助。伴ひ歸る忠臣義士。例は少き君が代にあぐる。譽は高雄山。勇み。勇むる夕間暮別れれににけり。

第二

自由する八幡山崎二山のオノ間を。棹さす船渡し。黄昏よりも火を點し。夜もすがら渡す故。狐川とはいふやらん。筑前の國の城主加藤左衛門繁氏卿。勤番の暇詣八幡をかけた山崎や。渡場近くなりければ暫く此方に立休らひ。ヤ家來ども。都是洛中洛外とも。何れをいづれ

と言はれぬ風景。携わけて男山の昔を尋ぬるに。豊前の國宇佐の郡より勸請ありし正八幡宮。御鎮座もことわり。紀州伽羅山ともいつつべき御山。入日に輝く風景。いやはやどうも〜。斯様に方々の眺めに心浮れ思はずも日が闇け。暮に及ぶ提灯の用意はよいか。堤兒れば渡し船も向ふへ漕行き戻るを待つも退屈。堤傳ひに行くべきぞ。案内せよとありければ。御供の若黨横口戸平。家老顔する緩怠者つと出でて。ハレヤレ殿には御存知ないか。此道は登船の引場。道のだくぼく中々歩まるゝ所ならず。旦那は乗物にもお召しなされうが。家來は何になるもの。渡しをお待ちなされよと。出過ぎた慮外も仁者の優美。いか様三里廻つて本海道といへば。悪所を行くは不行作。所の名さへ狐川ばかされてはなるまいと。御戯れも時の

興。挾箱に腰打掛け、暫し。休らひ給ひける。日暮を急ぐ旅人の。五人七人一連れに乗り後れじと岸際。立集れば向ふより。漕來る船も人の鯨着くと。乗人は乗るとする。上るとすると兩方が。採合ふ中に浪人と思しき武士が上りがけ。又こちらより乗る人も同じ風なる侍が。せり合ふ中を指合うて何とかしけん互の大小。もぢり合ひしを急ぎ業ほどく拍子に一方の。脇差ぼつきと。折れにける。色はつとばかりに折られし侍。面目なさに笠傾け。竹む内に相人の浪人。行過ぐるを堪へ兼ね。侍暫しと呼びかける。急ぐ身なれど是非なくも立ちとまりし互の氣相。スハ事こそと船は逃げ。繁氏卿も乗後れさながら逃げて退かれねば。詮方煙草くゆらして、打眺めてぞおはします。色件侍折れたる脇差拾ひ持ち。相手に向つて詞も荒さず。誠



恥を申さねば理が聞えず。拙者めは遠州の過ちとは申しながら。此方と指合ひに者。永々の浪人故尾羽打枯し。餓死せん此如く差添をこち折りあれに歴々も見てよりはと存じ。武士のあるまじき一腰をござれば。面目のすゝき様なく難儀に及賣代なし。奉公稼ぎに西國へ罷下る。時ぶ。色何とぞ了簡の付くべき儀ならば了

簡付けてお通り下され。御それとも。御
 思案に及はずば御不肖ながら相手にな
 り。討果して下されうや。お返事。次
 第と相述ぶる。相手の手待ちつとも臆せ
 ず御尤も至極。手前鹿相者故思は
 ずも不調法。ガ討果す儀をお詫びは申さ
 ぬ。しかし差添が竹光故。面目ないとは
 御胸中が小さい。ア、これ。差添
 でも武士の魂。竹光でも苦しうないとは
 な。ホ、一筋なお心故。是しきを恥辱と
 思召す。イデ某が大恥かいてお目にか
 けんと。刀拔出し両手に握り。遠慮會釋
 も頼口に。ぼつきと折つて目先へつき付
 け。これ御覽候へ手前も此通り。拙者
 めは播州浪人。都方へ奉公稼ぎの路銀な
 にかに詰りまだ其許は差添拙者は刀。恥辱
 は倍増す武士の魂。折つて見せたは
 外聞を共に現はすお腹癒せ。御それとも
 打果す儀に違背は致さぬ。お相手になら

うか。と申して好みも致さず。又逃げも
 仕らぬ。いか様とも御勝手次第。サア
 お返事はと膝立直せば。ヤレおせきなさ
 れな言分ない。ハレ其許にもいい頼
 難なされたの。お腰よしなき儀を申しかけ
 お刀を折らし。お腰が書いて氣の毒。
 イヤ拙者めが鹿相で其許のお腰が。ハテ
 それは此方も鹿相。是は。夜中故し



かとお顔も見えず。御縁あらば重ねてお近附きに罷りならう。左様致さう。ハレヤレお暇を取りましたと。互の禮儀、砂打拂ひ。立別るゝを横口戸平。大口あいて高笑ひ。ヤレ〜。いかに浪人すればとて。折れる物を腰に挟み。奉公様ぎとは野太い和郎たち。伊デ武士の見せしめに面見しておこと立上るを。繁氏はつたと脱付け給ひ。御帯刀に手をかけて怒りを含む御顔ばせ。悪者づくりも主の威に、恐れてかしこに。うづくまる。色行過ぎたる二人の侍立ち止まつて一思案。心ならずも双方が引返して暫くは。互に詞もなかりしが。臨差折られし侍小腰をかゞめ。誠に其許には刀を折り。我が心を宥め下されたれども。今お聞きの通りあれなる御家來。何かと悪口せられ。何とも此場が濟み難し。御思案極め下されと横口戸平を尻目につ

怒りを含む物腰に。いか様。あの通りに沙汰あつては。お互に身上仕官の妨げ。一旦濟んだる事なるによしなき匹夫の口先故。討果す事近頃残念。と言うてあれしきを相手にも大人氣なし。また其主人へ兎や角いほど浪人の糧に盡き。物取りなどとさみせられん。エ、是非もなき次第。此上は潔う刺違へ。最期を共に致すまいか。成程拙者もその覺悟。ハテ命冥加な下郎めと。繰返しく〜残り多げに戸平を脱付け。伊ザ此所で。尤もと双方最期の身拵へ。繁氏外の家來を招き何か囁き給ふにぞ。相心得て乗物より。御差替の大小を、しがて取出し差上ぐる。色其間に兩人座を占めて。既にかうよと見えければ。ヤレ暫らくと立寄り給ひ。最前より御兩所の心底尤もさこそあるべき儀。併し。大功は細瑣を頼みずと申す。儘かの恥に命

を捨て。いづくの誰と知らざれば大死も同然。またお腰のあいたるは。差錯びたれども某が差替にて塞ぎたし。異議なく貰ひ給はらば喜悅ならんと一腰宛。差出し給へば兩人とも。はつとばかりに平伏し。有難き御裁配。違背申すは憚りながら。いづくいかなる御方とも存ぜず。まして御恩受ける筋なし。此儀は御免と辭退の詞。ホ、一理あり至極せり。其儀は。筑前の國藤左衛門繁氏と申す者。即ち當所は。禁庭より馬の飼領に下し置かれ拙者が領分。其場にて兩人とも横死あつては跡の難儀其難儀を遁れん爲。進上申す此兩腰快く受け給はゞ。いかばかり大慶と。退引ならぬ仁者の詞。ハ、ハ、はつと押戴き〜冥加に餘る御情いつの世にかは忘るべき。元我々は何某と。いはんとするをア、これ〜。お名承つては。恩にかけると申すもの

志が無足致す。顔も知らず名も知らず。重ねてお目にかゝつてもお近附でござらぬぞ。急ぎの道お出であれ。お立ちあれと。慈悲に慈悲ます御詞。兩人餘りの有難さに返す詞もなき中に。猶も手をつき頭を下げ。斯くまで深き御情申すは恐れ多けれども。とてもこの事に此場の仕儀。御家來も沙汰なき様仰せ付けられ下されと。願へば繁氏返答なく。最前笑ひし若黨の横口戸平を呼出し。汝に別して用事あり。是へ來れと仰せに任せ。何心なく來る所を飛びかゝつて首打落し。手前の政道は斯くの通り外に他言は致すまい。お別れ申すと細道を。わけて情の御裁き。有難しとも兩人は御後影。伏拜み。伏拜み。爰は所も男山。正八。幡の化身かと。思ふ迷ひも狐川。渡しを急ぐ旅人と。陸を早める浪人の。心は一つ。行く道は。二つに隔つ。淀堤左右

へ。こそは。三へ別れ行く。梅を諸木の兄とせば。櫻は花の。振袖や。姉が小路に美を盡くし華麗を飾る殿造り。加藤左衛門繁氏の館には。庭を野山と櫻狩上下。さざめき賑へり。奥方近き坪の内下部の出入叶はねば。腰元衆が掃除役。中にも小りうが竹箒座取りさらへと掻きまぜて。問はず語りに何と皆の衆。此廣庭へ出臍の様にあの社は何といふ神様ぞ。あた邪魔な掃除がならぬ。箒ついでに掃出そちやあるまいか。コレあの人とした事が。あれはお國から勸請なされた殿様の氏神様。鹿尾になどしやつたら。逆討が當ろぞやム。お國から取寄せのをば勸請といふかや。そんなら今度お國から。勸請なされた御臺様。千鳥様と殿様のしつぽりを御覽じたら。ふんすんでたまるまいと。案じたはあての棧。お妾女郎と奥様の中よいはどうした

事。あんまりで拍子が無い。序に怪氣もお國から。勸請したらよからうと。フッ苦もしどもなき高咄。折から屏の外面には。萬よしなを取交せて。賣る商人の聲高くほの聞ゆれば腰元ども。そりやこそいつもの百物賣。小面の憎い商人め裏門から呼込んで。翫つて遊ばちやあるまいか。こりやからうと騒ぎ立ち何がな見たがる聞きたがる。浮氣盛りの女の童門の戸明けて呼込めば。ハイ粉類なら何なりと。蕃椒でも胡椒でも。イヤそんなもな入りませぬ。いつもの様に賣立て、聞かさつしやれ。それが厭なら何にも買はぬ。早うくと口々に。せがみ立てられまつかせと。頬杖ついて聲張上げ。豆の粉や。まめな手くせに尻こぶた。ふつつりひよりと山椒の粉。奴様には蕃椒。坊主の好きな胡椒の粉。若い嫁御のはなはしく。姑御には

辛子の粉。おてきに盃さしめぐさ。合身柱。直達。すゑて心もちや。吉野葛。ナホス。フシませいとぞ賣りにける。腰元どもは目を引き袖引き。ママ當分何にも入らぬ。大儀によう喋りやつた。地こく去にやと打笑ひ。一度に奥へ走り入る。商人は荷を下し。今日も亦取りくさつた。テモなめ過ぎた女郎さいどもと。嗚きうそく差覗き。うろつく内に監物太郎。ひよつと來かゝり小蔭にて。窺ひ居るとも知らぬが天命。荷箱の内より大小取出し。身拵へしてのつさく。忍び入るを曲者待てと呼びかけられ。南無三寶と振返る。隙をあらせず庭に飛び下り。綱んで大地へぎやつとのめらせ足下に踏まへ。ヤアラ心得ぬ賣人め。荷箱の内より大小取出し。奥を目がける氣相いか様仔細ぞあらん。眞直には白狀せよ。骨を斷つても言はせにや置か

ぬと。地掘付くれば吠面ながら。下郎とは舌長し。汝等が崇まへかしづく。千鳥の前が兄黒塚鬼藏人。繁氏が爲には小舅。主同然の某を。土足にかける野當りめと。いふに驚く色目を隠し。シテ其兄が何故に。斬込んで誰に敵對。目指す相手の名は何と。ヲ、その目當は加藤左衛門。繁氏が首取つて。知行にすると加返すを。起しも立てす扱こそと。刀の提緒手ばしかく後手に括り上げ。定めて一味の族もあるべし。密に詮議と引立つれば。奥より來る女中の足音。見付けられては詮議の妨げ。如何はせんと取つ措いつ思案の扉開いて幸ひ暫しの獄屋。神は見通し許させ給へと社の内へ。無體に押込み錠しつかとおろし置き。さらあらぬ體にて入りにけり。妹脊の中に。固りし石動丸の御母君。牧の方とは申せども子持ちと見えぬ御形。花見座

敷へ出で給へば。跡に續いて千鳥の前。大内山の木隠れより移し植ゑたる花なれど。さすが妾と本妻の。フシ禮儀は戀の品定め。ナウ千鳥様。連合ひ左衛門繁氏様。七年あまり禁裡の勤番首尾よう勤めておしまひなれば。是からお國で御休息。永々の在京に。夜のお殿の御もなり代り殿の心を慰むる。そもじ様があるとの噂。國許で聞く其嬉しき。とんて心が落着いてゆる／＼上りし今度のお迎ひ。けふは歸國のお願ひに。禁裡様へお上りなれば。お暇が出るや否や。こなた様を國へ伴ひ。たアんとお禮を申さなやならぬと。奥底もなき御挨拶。是はま有難いお詞。今更申せば何とやら。言譯がましく悪けれども。地色數ならぬ身の殿様に添伏し。御臺様のお目にかゝらばお叱りもあらんかと。思ひの外な御憐

み。さう結構におつしやつてはお返事も
なりにくし。千鳥よどうせい斯うせい
と腰元衆同然に。御意なされて下さり
ませ。ハアテわつてもない。大事の殿
御を半分づつ。いとしばがつて貰ふも
の。如才にしてよいものか。其代りに此
上外で殿様の。悪性があるならば。二人
して言はうぞえ。そりやお氣遣ひ遊ばす
な。お前にお世話はかけませぬ。御名
代と二人前私が番を致しませう。ヲ、そ
れくと頷き合ふ。仲よき魚と水入ら
ず。腰元どもは手をさそにお氣慰みと
持運ぶ。雙六盤や歌がるた野風爐提重茶
辨當。取散せしはお座敷を野山に移す花
見酒。數々めぐる。盃に御臺所興じ給
ひ。おつ付け殿様お歸りあらん。お目
にかけるも二人が御馳走。アノ櫻を題に
して腰折れなりと一首宛。短冊をつけ
まいかこりやようお氣が付きました及ば

ずながら私もと。雙六盤を眞中へ。脇息
に押直させ二人が臂をかけまくも。か
こき國の和歌の道。案じ入つたる御酒
機嫌。心隔てぬ中々は。何に遠慮もな
ぎさ漕ぐ海土の小舟や。とろく目。す
やく寝入り給ひければ。腰元どもは嘯
き合ひ仲のよい同士打解けて。御テモ快
う御寝なつた。お目のあくまでこちらも
暢氣と。座敷の障子そつとさし。皆
皆一間に入りに入れる。程なく左衛門繁
氏卿歸館を告げる奥使。跡よりしづく
入り給へば。監物太郎出で迎ひ是はした
ないかと。殿様のお歸りを。奥方には御存じ
なせそ。餘念なく寝入りし體。互に妬
む色もなく。睦まじきこそ満足なれと。
地悦び給へば頭を下げ。何様御意の如
く嫉妬のあるは婦人の常。その氣遣ひな
き御二方。斯くまで御仲よろしき事我々

までの大慶と。申し上ぐれば繁氏卿。
傍なる盃取上げ給ひ。禁裡表の首尾も
よく。歸國の暇を賜りし悦び。我も彼
等が花見の相伴二人が風情を肴にて。花
の本の一獻。酌せよと宣へば。ハ、ツト
銚子を押取り。注ぎかけたりし不老不
死。薬の水の滴りと一つ受けさせ給ふ折
ふし。雲心なく吹く風の盛りを散らす
一嵐。受持ち給ふ。盃へ第一房落ちに
ける。繁氏つくづくうち詠め。散れ
ばこそ。いと櫻は目出たれとは詠み
たれども。雨に萎み風にもまれ。盛りの
散るは科ならず。いまだ時にも逢はぬ此
蕾。盃の中へ散つたる事。是こそは人
界の儚なき教への老少不定。老いたるが
先立つとも。若きが跡に残るとも。地色
定め難きは人の命。忘るまじきは後生の
道と。文武に猛き繁氏の無常を觀する悟
道の一言打ちしをれたる。御有様。監物太

郎も尤もと共に悟りは開けども。わざと
 詞に勵みを付け。詞コハいひ甲斐なき御
 迷ひ。釋迦といふ實僧頭。さま／＼の僞
 りを書散らし。一文不知の姥噺をたらさ
 ん爲の一切經。譬へて申さば盜賊を捕
 へ。殺生なりとて助け歸さば國家の憂と
 なる道理。地アタ忌はしき後生の道と。
 心に思はぬ雜言に佛法誹るも諫めの忠
 言。心を感じて打領き。誠に汝がいふ通
 り弓馬の家に生れながら。假にも無常に
 引かされては武の道は立ち難し。詞この
 後ふつと思ふまじさりながら。よしな
 き事に心も滅入り何とやら物淋しく。地
 次の間にて檢校に琴を弾かせよ。御賽や
 千鳥に目を覺させ我は是にて慰まん。フシ
 早とく／＼と宣へば。地色只當然の御戯れ
 強ひて諫めに及ばすと。サツリ御前を。へ立
 つてフシ入りにけり。詞ホ、いつになき我
 佛法歸依。武邊に弛もつかんかと案する



は尤も／＼。地色イデわつさりと酒宴を催
 し結ばれし氣を晴らさんと。立寄り給ふ
 障子の内。コハ不思議や俄かに物騒がし
 く。あたりに響き。庭の木草もさわ／＼
 と。オホフシ風も身に沁むばかりなり。地
 コハ心得ずと一間の障子。さつと開いて
 見給へば。餘念なく臥し給ふ二人の黒
 髪。眞逆様に蛇の如く。鎌首ぼつて喰

合ふ有様。さしもの繁氏怖氣立ち、フシ果れて。詞もなかりしが、地色ハツア恐るべし。外面似菩薩内心如夜叉と説かれたる。佛の戒め目のあたり。顔に白粉丹花の唇。粧ひ飾りて菩薩の如く。互に妬む顔もせず。打見には仲よき體。心の底に邪鬼執念。絶えせぬ證據をおのれと顯はし。かく淺ましき體たらく。忌はしや穢らはしや。妻子は地獄の家土産と。説き示されしに。フシ疑ひなし。地色花の蕾の散つたるに思ひ較べて觀すれば。是ぞよき菩提の種。家國榮華も望みなし。迷ふが故に三界の。火宅に、フシ心を苦しめり。地色悟れば十方空ならずやと。今迄心の滅入し上。いや増さりたる發起心ナカリ烏帽子へ狩衣脱ぎ捨て給ひ。差添抜いて鬘を。ふつつと切つたる輪廻の絆。硯引寄せ書置を。エネヲ認め給ふ其内に。奥座敷には檢校が。琴の音色もしを

らしく。山歌の唱歌は聞えねど。弾く爪音は薄雪か。薄き契りも過去の因縁。必ず心残すなとこまゝ筆に書盡くし。御鬘に烏帽子装束。書置添へて彼處に

置き。裏門より悄々と立出では出でながら。さすが恩愛捨て難く。振返つて涙くれ。二人が夢覺め斯くと知らば。まぞ軟くらん不便やと。見やり給へば蛇形の



黒髪。コハリ猶も盛んに挑合ふ執着心に
ナホス愛想もつき。身頭ひ立て、足早に。
フシ行方知れずになり給ふ。地獄斯くとも

知らず監物太郎。立出づれば一間の騒
動。見れば件の怪しき姿。驚きながら走
り寄り。用捨もなく喰合ふ黒髪。差添抜
いて斬放せば。二人もびつくり起上り。
顔を見合はせ一時にフシ吐息を。ほつと

つき給ふ。監物太郎あたりを見廻し。
我が君はまします。御烏帽子狩衣の。
脱捨てあるこそ心得ねと。立寄り見れば
御髻に。一通添へて残されしは。はや
御通世か情なやと。驚き騒ぐに二人も立
寄り。イヤ殿様は通世とや。何故の御
出家ぞと。あまりの事に興さめて。泣くも
泣かれずうろ／＼と。フシ共にくらたへお
はします。監物やう／＼心を鎮め。フシ
ヲ驚き給ふは道理。先程禁裡より御歸館
の節。いつに勝れし御機嫌。あれなる櫻

の本にて御酒宴の折から。御盃へ花の雷
散つたると。無明の悟りを開き給ひ。

地獄さも心細く御意なされしを。打消し
ては置いたれども。御兩人の髪逆立ち。
蛇の如くになつて喰合ひしを。御覽あつ
ての殘心かと。歎くに御臺千鳥の前。
く。咬つつ咬はれつ争ひし。互ひの覺え
一時にヌエテどうど。轉びて泣沈み。フシ前
後。不覺に見えけるが。イヤ、恥かしき
は人の心。此度都見物がてら御迎ひに上
りしが。千鳥殿と殿様との睦まじさ。見
るよりも妬ましく。胸もかき裂く腹立

合へども。寝た間に本心顯はして。浅ま
しき有様を。お目にかけしか悲しやなせ
めては國に残りたる。石動が大人しく生
立つ迄。思ひとまりて給はれかし。呼び
止めてくれぬかと敷き給へば。千鳥も

涙。掛けはひ化粧紅鉄漿より。髪形ぞと
艶付けて。かた筭よ吹上よと。結び捕
へしは殿様に。見限られまい爲ばかり。

其髪が蛇とならば。身體は鬼にもなりか
ねまい。見捨て給ふも道理ぞや。御出家
も皆私が業。イヤ通世をさせませし。科
人は自らよ。イ、エ私が。ハテわしがと。
涙みなぎる繰言に。愚案半ばの監物も。
フシ袴の襠に淵をなす。御臺所は涙を押

さへ。イヤ／＼泣いては済まぬ事。まだ程
遠くはござるまい。追つかけて止めん
と。千鳥諸共立上るを。イヤレ待ち給へ
と押し止め。とくより某左様は存ずれど
も。いか程お止め申すとも最早止まり給
ふまじ。色先づは残し置かれたる御書置
を見給へと。一通を差出せば。是非もなく
なく取上げる。涙に聲も震はれてしどろ
もどろの讀みくせを。千鳥も共に差取け
ば。涙ながら書残す一通。一つ。われ

弓箭きうせんの家に生れ。なに暗くらからぬ身みなれども。家國けこくを捨てて妻子つまこを捨て。世も捨す人ひとの沙門しゃもんとなるは。前世ぜんせい未生みせいの佛縁ぶつえんならん。思おもひ測はからず降くだつて湧わいたる通世つうせいを。胸狹むねはき女に心に。淺あましき姿すがたを見せける故ゆゑと。嗚なかし歎なげきの餘あまり。共に姿すがたも變かへまと思おもふらん。フシさにあらず。地色ぢしき妻子つまこ珍寶ちんぼう不隨ふずい者とあれば。死出ししゅの旅路りぼは別わかれ別わかれ。伴ともへる人もなく。隨まふ者ものもなく候まう。則すなはちとは言いひながら。只ただ忘れがたきは石動いしどう丸まる。やうく二歳にさいの時國ときくにに残のこし。それより又また七年ななとし餘あまり。顔かほも見みず候まうへば。ざぞ成人じんじんも致いたし。大人おとなしくもなりつらんと。思おもへばいと懐なつかしく。忘わするゝ事は是こゝになく候まう。石動丸いしどうまるを傳つたへ立たて。加藤かとうの跡目あとめを繼ついでがせてたべ。父ちちが此身こゝみになり候まうへば。若わかしや流浪りゅうろうも致いたさんかと。是こゝのみにかう案あんじ候まう。必ず歎なげきにくれ。地悴ぢせがが事を忘わすれぬやう。返かへすくも頼たのみ入り候まう。千鳥ちどりへ

も一通いっとうを。殘のこさんと思おもひしかど。心こゝせかれて候まうま。此文こゝぶんを一いち所に詠えいめ。牧まぎの方かたに力を付つけてくれよかし。言いひたき事は山やま々なれども。涙なみだに筆ふでも廻まわりかねるまじく。讀よみも終おつ三人さんにんは。ヌエテわつとばかりに。泣なげ沈しづむ。監物かんぶつ太郎たろう那涙ななみだをおさへ。殿とのの事は歎なげきても詮まなき事こと。一大事いちだいじはお家の跡目あとめ。若君わかしの御身ごみの上うへ。殊ことごと更さら隣國りんこくには。大内おほうち之助のすけ義弘よしひろといふ候まう人ひとあれば。君きみ御通世ごつうせいなされし事を押お包かみ。幸さいひ歸國きこくを許ゆるされし砌まじ。いつもの如ごとく繁氏ひらたけ卿けい御歸國ごきこくと世上よこへ見みせかけ。御臺ごたい様に我君われきみの裝束まうそくを召まさせ。一刻いこくも早く國許くにきよへ御供ごともして下くだるべし。跡目あとめの願ねがひはお國くにから。急いそいで御用意ごようい遊あそばせと。せき立たつ詞ことばに歎なげきを止め。兎角うしかくよきにと烏帽子えぼし狩衣かりぎぬ。取とり上げて立ち給たまへば。千鳥ちどりの前袖まへそでを扣ひへ。私わがもお國迄くにまでお供ともは致いたす身みなれども。お前は石動丸いしどうまる様さまといふ若君わかしあ

れば。是こゝに越こしたる形見かたみはなし。地色ぢしきせめて朝夕あさゆふ御身ごみに添そひし。此烏帽子こゝえぼし狩衣かりぎぬを。妾めかけに下くだし給たまはれと。取付とくを監物かんぶつ太郎たろう。御尤ごよしもには存ぞんずれども。たつた今いまお聞ききの通り。御跡目ごあとめ相續あひつぎの力ちからと致いたす烏帽子えぼし狩衣かりぎぬ。此方こゝかたには進すすむにくし。ハテ何をなにかをな。ヲそれよよく。地ぢ究くわう竟まつ一の形見かたみありと。社やしろの鍵かぎを取とり出し。是こゝはあはれるは祠ほらの鍵かぎ。社やしろの内うちには其許そのゆるの。大切たいせつになさる形見かたみあり。扉かどを開ひらいて取とり給たまへ。併あし爰こゝをよく得心こころをあれ其形見かたみの成行なりゆきにて。御ごお國くにへお供ともは叶かなはずと。鍵かぎ投なげ出し謎なぞをかき。御臺ごたい所ところを誘いざなひて。奥深おくふかへくこそ入いりにけれ。地色ぢしき千鳥ちどりは一句いちごの判はんじ物もの御形見ごかたみの成行なりゆきにて。お國くにへ行く事ことならぬとは。どうやら物もののある言いひ方かた。譯わけこそあらんと庭にわに下くだり。社やしろの傍そばへ立たち寄よつて何かは知しらず聞きいて見みんと。錠前じやうぜんあくれば待まち兼ねしと。飛とんで出ででたる忠藏ちゆうざう人ひと。ヤレ怖おそや

と逃退にげしが。顔を詠めてヤア兄様か何故爰に。縛られたはどうした科と。驚きながら親は泣き。縛り解けば身構へし物をもいはず駈出すを。コレ待つた滅入殿。監物太郎が一言に。思ひ合はして思案をすれば。どうでも様子があるわいの。ヲ、いうて聞かさう某は。大内之助義弘殿に頼まれ。加藤左衛門繁氏が首を取り。出世の種にするわやい。故せと振切るを。駈塞がつて待つた待つた。それぞれで何にも様子が知れた。それなら矢張り縛つて置こもの。様々な悪人。一所でないといふ證據。御臺様や監物殿への言譯と。走寄つて藏人が差添拔取り。手早く眞向斬下ぐれば。南無三寶と拔合せ。爰を最後と戦ふ太刀首。監物太郎は小蔭に隠れ。それと見ながら詞もかけず。庭には兄妹修羅の巻火花を散らして。鬼斬結ぶ。鬼藏人は

油断にて。初太刀に受けし眉間の深疵。眼も眩み滅多斬り。こなたも手弱き女の手業。數ヶ所の疵によるぼひながら。難なくおつ伏せヲ乗つかより。奮念力通す止めの刀。監物太郎庭に飛びおり。ヲ健氣なり千鳥様。御心の操綱はれ。疑ひは晴れたれども。此深手ではもう叶はぬ。心はいかにと勞はれば。苦しげに起直り。自らとて殿様の。お情受けし者なるに。様子によつてお國へは。叶はぬとありし時。酷い仕方と恨みしが。此しただらでは疑ひの。かゝるは道理わしが因果と。諦めて居ますれども。兄妹の悪心故。おのづと殿様に御縁が切れる。是ばかりが黄泉の障りと。血汐に染みし五體を投げ泣く聲。奥へ聞えてや。一間の障子。押開き。御臺は烏帽子狩衣を召され。悠々と立出で給ひ。我こそ假の加藤繁氏。千鳥の前が誠を感

じ。二世も三世も變らぬ契りと。へば手を合はせ。嬉しき今のお詞は。我が君のお詞より。忝さは百倍と。につと笑ふが置土産。此世の縁は切れにけり。いとしゃやなうと御臺の歎き。泣いて歸らぬ愛別離苦。いざさせ。給へと引立て。頃は薄暮よき時分と。せければせかるゝ牧の方。力なく。立ち給ふ形見は跡に心を残す。若せし人は代るとも變らぬ烏帽子狩衣。假の浮世に迷はじと。悟りて出でたる主は。直ぐに金色菩薩の位。歎き給ふな歎かじと。悟れば果敢なき花の宴散。りにし妾を残し置き本國。にこそ立歸る

第三

富んで奢らず貧しうして貧らぬは未可なり。富貴にして禮を知り貧しうして樂しめとは。弟子に示せし孔子の詞。大内

之助義弘威勢九州に墜り。自ら武運を朝
口にたくらべ楯雲將軍と尊號し。人も許
さぬ高胡床浮べる雲の上見ぬ驚。明日は
我が身も知らぬ日のフツ筑紫の御殿と時
めきける。地色伺候の諸武士も白から伸上
つたる大名氣質。中にも近習の關口隼人
御前に進出で。舞撥て仰せ渡されし通り。
近國の大名より家々に傳はりし重寶。今
日獻上致す筈。則ち寶見分の役は多々羅
新洞左衛門と承る。それにつき彼が娘。
お國に稀なる美人なれども。いかなる事
か終に男の肌觸れず。生れのまゝなる生
娘と諸家中の風聞故。御手廻りの召使に
と存じ。上意と申してお次まで。呼寄
せ置き候らひしが御慰みに御覽もやと。
何がな御意に入らざる追従。フッお髻の塵
を取りかける。地色義弘寛々と打領き。御
勅説と偽り諸國の寶を集むるは某が謀叛
一味の證。速判狀も占めかしく。氣をか

へて人質の代りにする。家々の寶。まだ
請取るには時刻も早し。其間にかの娘ち
よと面を見んそれ〜と。仰せに斯く
といひ次げば。やがてへ御前に立出づ
し。地色世に拗ねて。男選みに。年長け
し。新洞左衛門が娘ゆふしでは。長
ひに殿御の肌知らぬおほこと見えぬ洒落
姿。髪は結目に挿したるは。梅花にあら
ぬ。白羽の簾矢。筈ならで。簪か何
の御用でお召しぞと。案じる内も面はゆ
く。お書院近く。フツ坐しにけり。横
雲將軍遙に見やりゆふしではお事よ
な。ハレ見事。よい器量ノ。汝が親の
新洞左衛門忠と義とに固まりし心より。
頑固に育てられ。麻につる。蓬とてそち
迄が身持ちも堅く。一度も男に肌觸れぬ
と聞き及ぶ。器量といひ風俗まであつた
らしき日陰の花。殊更男選みとあれば
疑ひもなき手入らずの大無垢。水揚はこ

の義弘今宵から抱いて寝ると。ほやりと
笑ふしほの目は。仁王の戀する如くな
り。ハツト思へどゆふしではわざと額
を疊に付け。私風情の賤しき女お腰間
のお伽致せよとは有難い事なれども。御
臺様の思召し一家中へ聞えても女早は行
くまいし。家來の娘をわつけもないと。
我が君を笑はせまますも如何此儀は御免な
されませぬ。ぼんに贅文殿様を微塵も嫌
ひは致しませぬ。慮外も厭はずつこべ
とお詞背くも君が爲と。辭儀する詞の扣
へ綱。切れもやせんと案じ居る。ホ、
ウ此義弘が言出すこと二言と詞を返す者
恐らくは覺えず。女に稀なる大膽者出來
したりさりながら。一天下の主となる某
十二人迄は女房持つても苦しからず。否
でも應でも妾にすると。深く魅入れし
鰐の口。通れるだけと手をつかへ。冥加
に餘る御意なれども。私はちと譯あつて

一生男に肌觸れて。身を穢す事ならぬといふ。申譯は頭にさしたる白羽の鏑矢。

細かな様子は父上に。地お尋ねあれば知る事と。いふに差出る關口隼人。ハハ

ゆふして殿悪い合點。殿様に惚れられるは此方の爲に福徳の三年目泰いとお請け申すが上分別。親御も浮み上る事。其頭に挿いてゐる白羽の矢が邪魔になり。

仰向に寝る勝手が悪くばデエ抜いて進せんと。立寄るをむつとせき上げこりや何しやると突飛ばし。親新洞左衛門が御前に居ねば高なしの我儘。男持たぬはど

ういふ譯やら仔細も知らず。親迄が浮み上るイヤ果報ぢやの福徳のと慙に穢れた土根性。そんなむさい女子ぢやと思やつたら當が違ふア、慮外ながら。サア手は

愚そなたの伸びた鼻毛の先でも障へて見や。地赦しはせぬと膝立直し睨み詰める理窟詰め。言込められてしがなの隼

人手持ち無沙汰に尻込みす。地義弘居士高になり小ざかしき女めと。肩先掴んで引摺り寄せ。阿女郎の餓鬼は十二三から男を見ればびろ／＼と前後を見る當代。

地察する所内證に隠し男を拵へ置き。其男への心中立。阿外の矢先は通さぬといふ心で。起請の代りに此鏑矢挿して居るに違ひはせまいと。地矢を撒抛つて引起し。サア不義者めが名をぬかせと。責問

はれてもゆふしではもとより覺え涙聲。阿コハ無體なる御尋ね私も木竹の身ではなし。地惚れてくれる殿御があれば欲しうなうて何とせう。持つに持たれぬ譯あ

つて脊丈伸びた此年まで。人の數にも入らぬ身を不便なともおつしやれず。酷いお主の心やなさら／＼不義の男はなし。疑ひ晴れて給はれと。身を悔みたる恨み

泣き、涙。片手に詫びければ。阿ヤまだ男めを庇ひをる。よし／＼言はせ様あ

りと。地口には言へどさすがは戀。目顔で嚇し立つたり居たり。身悶えすればお次より。ヤレ待ち給へと聲かけて。立出づるは新洞左衛門撃返りし天の邪鬼。隼

人はお座に堪り兼ね。阿老人の御苦勞に悪い所へよう御出で。地それにゆるりとお遊びと言捨てこそ／＼逃げて入る。

阿娘を引退けどつかと坐し。阿不義の相手が聞きたくば某が申上げん。娘が隠し男は忝くも我朝の神の司。天照皇太神

宮。何と肝が潰れますか。したが斯うばかりでは合點行くまい。コレ殿耳を浚へてよう聞かしやれ。此お家大内の御先祖伊勢兩宮を當國へ御勸請なされ。其社より一人づつお座子を取り給ふ。印には家の

棟へ不思議に白羽の鏑矢立つ。其役を勤めた我が娘。一旦神に仕へし女一生男を持たすまいと。誓ひの爲に神明の鏑矢を頭にさ／＼せて不淨を拂はす。地それを無

體に抜取つて妾にするの足かけのと。罰をかぶる御合點か。其上これ迄の程謀めても。聞入れのない謀叛の企。今となつて意見せぬは。所詮いうても得心は召さるまい。ハテ毒食は皿ねぶれと諦めてする奉公。地ろくだまに望みも達せず榮耀らしい妾狂ひ。まだ早い。置き召されと。病犬の嘯み附く如く。只一口にわんとばかり。性急なる大内之助。堪へ兼ねてすつくと立ち。ゆふしでを宙に引揚げ元の所へどうと投擧る。扱はいよく、推量の通り。親め共に吞込んで内證に男があるな。我が心に従はぬ腹藏。眞二つにぶち放し。其男めに鼻明かせんと。大太刀するりと抜き放せば。わるはれもせず押直り。父まで深き御疑ひ。曇りなき身は天道が正直。お手にかゝるが申譯と合掌したる健氣さを。見やりも

せぬ片意地親爺。サア今こそと義弘は。父が顔を差取ればびつくとせぬいがみ面。サア／＼と二度三度。嚇しの双を振上げく。閃かしてもきよろりが味。サア扱もしぶとい奴等。エ、是非もなし是迄と。既に危き太刀の下ナウ待つてたべ暫くと。大内の御臺走り出で。重々のお腹立ち御尤もと言ひながら。戀ばかりは高押しにいふ程埒の明かぬもの。自らにお任せあらば何とぞ勤めて今日の内。お前の心に靡きやる様私が世話を致しませうと。すかし有める物腰に。貞女のしるし顯はせり。戀は曲者鬼にも涙。情強きどち女郎おち殺してしまはんとは思へども。なれば又拾ひ物。少しの間お身に預ける返事が遅いと赦さぬと。詞のぬみに御臺は心得たつた今よいお返事を。お氣遣ひ遊ばすなとゆふしでを引立て。尾を踏む心地

虎の間へ。伴ひ入らせ給ひけり。色跡には王従物をもいはず。あなたは洗面なたは工面。睨み合うて居る所へ。國々の諸侯より寶を持參と呼ははる聲。俄かに緒大將の衣紋美々しく座を占めて。待つ間程なく入り来る。青貝の卓忝しく。日八分に差上げて二つ並べし珊瑚の枕。是は菊地の陶全妻が寢た間も放さぬ重寶なれども。勅諭とあれば力なく。持參致し候と。廣庇に押直す。地次は豊後の友方大學。水晶籠を臺に据ゑ。この簾は其昔。晉の國より渡りし寶。庭に掛くれば。風を生じ。自然と雨を降らしつ。暑氣の時分は。冷やりと西瓜もどき夕立もどきと。差上ぐる。さして其次は肥前の國。海月式部が重寶に。白龍石といふ硯。墨する度に硯より。おのれと水を湧き出す。不性者には第一の。寶なりとぞ言ひ上ぐる。その外松浦五島の

一族。筑紫表の國主城主、皆家々に傳はりし。名物寶を臺に据ゑ、廣縁狹しと並ぶれば、見分の役人は新洞左衛門。腹は立てども其日の役目不承無性に見定め。いづれも寶に相違なし。誰かある此品々御藏の内へ納めよと。呼ばはれば伺候の武士でんでに捧げ入る體に。先づは首尾よう納まりしと。諸國の城主も安堵の胸、皆々へ旅宿に立降る。

地色遙かにさがつて筑前の城主繁氏の執權。物に騒がぬ監物太郎寶も持たで悠々と。白洲の庭に入り來るを。地義弘つくく打守り。九州の大名より残らず寶を差上げしに。加藤の家より何として寶は送らぬ。宣旨を背くか但しは氣儘か。返答せよときめ付くれば。ちつとも動ぜず御尤もの御不審。勅説とある上いかで違背の候べき。併し筑前は小國故差上ぐる寶はなしと。地言ひも切らせずさ

うは言はせぬ。大名の家に寶なくて家督の繼目は何を以て規模とする。イヤ我が國は仁義禮智。五五常を寶として國家を治むる。但し此國には器財を以て寶とし。君子の教へを寶とはなされぬかと。理窟を詰めて言込むれば。もとより不才の大内之助、返す詞もなき所を。

地色塔へ兼ねて新洞左衛門目玉を剃出しコリヤく監物。それは唐土臨流の會に善を以て寶とすと。伍子胥がいひし口眞似食はぬく。加藤の家には齊國より渡りたる。夜明珠といふ名玉ある筈。いま玉女神と神に仰ぎ尊敬する事紛れなし。是非玉を渡さずば大軍を以て押寄せ。家國共に奪ひ取ると思ひ退引させぬ手詰めの難題。此場を遁れて分別と無事を繕ふ當座の請合ひ。玉女神を夜明珠と御存じなれば力なし。成程寶珠を渡し申さんさりながら。地年を數へて二十と限り。

遂に男と肌觸れず。交合の道を知らぬ女あらば。玉を迎ひに越さるべし。若しも年に過不足あるか。一度でも男に肌觸れ。身の穢れたる女の手携へ持てば。忽ち玉の光を失ひ石瓦の如くなる。その刺符の合ふ女があらば何時でも玉を渡すに相違はなし。某は先づお暇と立歸るを待たせ。使の女これにありと。

走出でたるゆふしだが。御前に向ひ頭を下げ。不義の男がある故御心に従はぬとのお腹立ち。其お疑ひ晴らす爲遂に妹背の道知らず。身を穢さぬといふ申譯このお使を私に。仰付けられ下されと。エエと思ひ入つてぞ願ひけり。地色監物太郎もぎよつとせしがコリヤ女。身の穢れぬが定ならばいかにも玉は渡さうが見事寶の檢分するかと。地何がないうて困らす思案。ワ、氣遣ひすな其檢分は此新洞左衛門。地娘に連立ち行くからは置物

は掴まぬく。シタガヤいゆふしで。そちには惚れた人があるこちの身體は清淨でも餘所から穢れを添ゆるといふもの。ソレ。其和郎が思ひ切るとおいやらねば使には行かれまいと。戀慕の絆を切らせん爲。大内が耳に打て響けを。聞き流して不興顔。返答もなく座を立つて。駈込む向ふへ御臺所立塞がつて申し殿様。御女一人に繋がれて大切なる夜光の珠。此度請取り給はずば禁裡表の首尾も如何。ゆふしでをさつぱりと思ひ切つたる證據を見せ。使を仰付けられよと。彼方此方でせこめられ。當惑したる大内之助思ひけん。ン振返り。後にかけたる弓押取り件の鍬矢引番。命に替へて某が思ひ込んだる戀なれども。大望成就の妨げなれば此戀ふつ／＼思ひ切る。證據の鍬矢受取れと。切つて放せば松の木に。シはつしと立つたる有様

を。ゆふしで悦び走寄り。矢を抜取つて押載きこの。お使を仕果せなば。一つで二十迄寝々した事を世上へ言譯け。君の心も晴々とも。ならぬ女の鑑にせんと。金帯引締める親子の勇み。監物太郎を先に立て。白羽の鍬矢。髻にさしかざしてこそ。三浦へ定めなき。三世を憂き事に。見限りて。遇世ありし繁氏卿歸國と偽り石動を。跡目に立て。監物太郎國家を治むる智仁勇。三國名譽の夜光の珠。玉女神と勸請し秋の最中の祭日に。館賑ふばかりなり。御臺牧の方石動君を伴ひ廣書院に出で給へば。執權監物が女房橋立神事の祝儀申し上げ。夫監物太郎大内義弘の招きによつて参られ。御寶の御神事に外れし段お赦しと。地断り申せば御臺所。心よからぬ大内の呼寄せ。我が夫の行方は知れず。石動は幼少なり。何言ひ越さんも測られず。

只なつかしきは繁氏卿と。啣ち給へば石動君。母様氣遣ひ遊ばすな。追付け父様の有所を尋ね。私が迎ひに参りますと。大人しやかに。ン涙もとまる折からに。國一番の濡男その名自然と女之助。兄監物が勸當請け詫びを頼みの奥書院。シウち／＼として入り来る。御臺は何のお心なく珍しや女之助。此程若も尋ねしが何故登城召されぬと。仰せにはつと頭を下げ。私儀不行跡ゆゑ兄監物太郎が勸當請け。それなる橋立殿を頼み様々詫おれど聞入れなく。是非に及ばず今日は若君様や御前様の。お詞を惜る所存。恐れながら然るべう頼上げ奉ると。願ひを聞いて御驚き。テモ扱も。堅いそなたが何越度。軍法秘密の論議でもしやつた上の。譚か。尋ね給ふを傍に聞く。橋立は吹出し。御臺様のあの人を堅いとはお日違ひ。其柔か。各自

墮落さ。軍法論議はさておき。女中論議で家中は大もめ。お上にも御存知の前の内儀お母殿は。夫監物太郎都より貰ひ歸り。夫婦に致され退引ならぬ女房を。子持ちになると乳臭いとて離別して。お物師のお縫殿とちんく。それも續かず弓頭の娘おつるを娶り。持つと去なしてお歴元の長門殿。それから仲居お茶の間の。白髪交りも色めいて。そこでは怪氣こゝでは喧嘩。何から起れば女之助。わしが夫ちや殿御ちやと。言募つて大騒動。堅い夫が面汚しと勘當せしも無理ならずと。語れば御臺も興さめ顔。若君何の差別なく。女之助はいかい苦勞。それから其喧嘩の仕舞。どうなつたぞと根問ひにほつと行詰り。其ソノ跡の儀は。面目もなき仕合せとッ謝り。入りし風情なり。御臺もをかしく若氣の至りもあんまり興がる。以後を嗜む心なら



共に詫びして得さすべし。幸ひ今日は御玉の祭。玉女神の御前にて金打させん此方へと。立入り給へば有難しと。石動君を御供し。ッ奥をさしてぞ入りにける。

程なく歸る監物太郎。大内が難題胸に釘打つて變りし思案もなく。廣間へ通れば妻の橋立。義弘よりの呼寄せ。いかなる事ぞ心もとなし。及ばずながらお聞

かせと。尋ねればさればの事。朝大内義弘は都の勳と偽り。近國他國の寶を集むる。これ正しく謀叛の下拵へと見抜きし故。我が國には寶なし。仁義禮智信の五字を以て寶とすと。伍子胥が辯を借つてまふまと言伏せしに。多々羅新洞左衛門といふ奴。夜光の珠の來由を知つて。汝が家に玉女神と崇むるは。齊國より渡りし夜明珠。寶なしとは言はせじと明白の一言。争ふにも争はれず。成程その寶あり。併し尋常の者携はる事はせず。地二十と限つて交合せざる女あらば。受取りに越されよ。男女の別ち知つたる者が手に觸れば。忽ち玉の光失ふと言傳へを難題に。當惑させんと思ひの外。小かの新洞めが娘當年二十。まだ是まで不犯にて此役目を乞ひ受け。親子連れにて受取りに来る筈。代々加藤の家の重寶。渡さば家滅亡。厭といはゞ大軍を以て攻來



らん。地さすれば御臺若君のお命も危し。鬼やせん角やと胸はどうづき。思案があらば言うて見やれと。語るを聞いて女房ははつと溜息つきながら。只此上は贖物は。急に拵へ渡さうより。外の事はといふを打消し。同イヤ〜其儀も思ひ付けども。うっかりと受取る新洞左衛門にあらす。地ハテどうがなと大騒の。骨も砕く

る一思案。及ばずながら橋立も智慧の袋の棚さがし。暗がり探す如くにて。フシ暫し途方にくれるが。イヤ申し斯様な時は膝とも談合と申します。幸ひ弟御女之助様勸當の詫にお出で。機嫌直され共々に。御相談はといふに暫らく工夫をめぐらし。ム何弟の放埒者。奥へ参つてゐるとな。ホ、ウよき相談相手。思付きあり女ども。汝も来れと立上がる。心知らねど橋立も夫の詞を力草。フ伴ひ一間に入りける。暫らくあつて大内よりお使者と呼ばはる聲につれ。月と雪との真中に花と眺める後帯。ホフ男選みのゆふしだが。片笄の濡髪にさいた白羽の鎗矢は。伊達か潜上か風俗もしとやかに立休らひ。誰を頼まんといひ入る。かゝる相手に相應の。女房選みの女之助。いざお通りといふ内も。思ひ合ます目遣に可愛らしさが身にこたへ。互

に顔を見交して。上座へ通れば。橋立がやがて出迎ひ頭から。しつぽりむきの挨拶にて。是はく女中の御苦勞にようこそお出で。自らは監物太郎が女房。橋立と申す者。またはなるは主の弟御。女之助と申して武道は勿論歌の道。並ぶ方なき優男子則ち今日の御馳走役。御用あらばあの人へと。猫に引合せ。いかな釋迦でも精進を。落しても見たき心なり。女同士こそ此方にもこやか。テモいかいお心遣ひ。私にゆふしでと申して。まだ人数にも入らぬ女。斯様な役に参る筈はなけれども。人好みあるお寶物。親新洞左衛門はお次に扣へ。マアそちが受取つて来いと不相應な役目を請け。案じく参りしなり。御事なうお渡し下されと。詞の内より何がさて。お渡し申さいで何とせう。夫も只今罷歸り御藏の掃除。暫くお暇が入

りませう。ヤ幸ひ今日は御玉の祭。神前へ供へしお御酒頂戴遊ばし。不淨を清めお受取り。それく神酒といふに任せ。對の徳利を三寶に。下女が携へ差出す。女之助近く差寄り。敵を招いて毒酒を盛り。約を變ぜし例もあれば。毒味致して進上と。御酒を兩方つぎ合はせ土器にたつぷと受け。つと乾してゆふしでに。頂戴あれとさしければ。是は御念の入りし事。縁につれたる神の酒。何お疑ひ申さんと一つ受けて呑む酒の。忽ち五臟に込み渡り。亂れかゝりし。顔の色行儀もくづれ土器を。女之助へ差戻す。サアしてやつたと橋立が。わざと咄も打解けて。近頃卒な事ながら。頭に挿されし白羽の矢は。いかなる故ぞと尋ねれば。是こそ私が殿御を持たぬ申請。幼き時この白羽家の棟に立ちしより。神のお伽のお座子となりしは

幸ひ。よい男好いた殿御のある迄は。人目の關の此白羽。片時も放し侍らはず。あはれ此矢を貰ふ氣な。お人があらば遣りたしと。女之助が傍近く。にじり寄りたる亂れ咲き。花ならば折れ。折る人は。ふぬし様ならでと縋り寄る。無色爰ぞと共に措寄りて抱付く程に思へども。傍に見て居る兄嫁の。手前を恥ぢて薄紅葉。高をしめたる橋立が傍から焦つてそれそこを。じつと引寄せ引締めて。二世の堅めが是迄の。不儀淫奔の返り花。あだ花ならば御無用と。そやしかくればゆふしでは。阿テモ粹な兄嫁御。悪性男をわしが手で。こなして見せうが下さんすか。仰せに及ばず互の縁づく。したが口先ばかりにて。どうの斯うのは皆浮氣。

意地。跡へは寄らぬコレごんせと。女之助を引立てる是ぞ工の勝落と。思へどどうやら恥かしく尻込みするを橋立が。鬼も頼めば人食はぬ。入らざるお殿儀と無理やりに手早く跡より押遣つて。一間をびつしやり閉すとはや。内陣ひつそと鎮まれば。纏子の帯なるばかりにてオクリ物靜へかにぞなりにける。地色橋立あたり見廻して。女之助の放埒も。福三年時の用。仕果せたりと思ふ所へ。多々羅新洞左衛門。生れ付いたる氣は苛ち。待ち久しくて次の間より歩み出で。コレ女中。阿娘は寶珠を受取つたか。まだかどうかやぞ聞いておくりやれ。地べらく何しをる事ぞと。膨れ返つた髷面を。引延ばさんと橋立が。やがて床几を参らせ

て。誰を寶盆お茶持て来いと馳走ぶり。阿イヤ茶はたべぬ貰は嫌ひ。滅多に馳走召されても。受取る物に遠慮はないぞ。地床几は役目恩には着ぬと。腰打ちかくる其内にも。橋立は一間の首尾。いかゞと思ひ立つ居つ狼狽へ廻るをコレサ女中。阿きよるく何しめさる。待兼ねて烏帽子首。強ばり申すと言うてくれめせ。但しは直に行かうかと。地立上ればア、是申し。阿今が祭の最中。ナニ祭とは。イエイナ。地かの夜光の珠のお祭と紛らかし。隙取る方便に傍へ寄り。阿お家の祭は先づ最初が鼻高。地其鼻の長さが三間半。男にしたら廢者。次が御輿と提灯。その提灯が餅搗いて。事の埒があかぬかと。いかう私は案じます。阿ア、これ。神事の咄聞きには参らぬ。御玉ばかりを受取るに。斯様の隙入り合點行かすと。地脱み廻せばうけうと。阿輕はずみに何ぞいな。玉といふに愚はなく。唐土には十和が壁。我朝にては驪龍の玉。伊勢の國にはお杉とお玉。飛んでは人魂怖

いは目の玉。地下女の玉でも軽々しう。

受取らるゝものかいな。マ、お前はお幾つで。お名は何と申します。ハテ面倒

な事を尋ねる。名は新洞左衛門年は六十。したり。ナンチャ。テモ扱もく扱

も。さつても若いお顔の。ア若うござる。お耳も聞えお目もよいかえ。耳も目

もよござるてや。お齒はえ。それもよいてや。サア其よい内から人は養生。折々

疝氣も出ようがな。ハテ出ようとまゝさ。イエくさう氣を苛つがいかいお

毒。それく頭によつほど白髪デエ。抜いて上げましょと。立寄れば突飛ば

し。エ七面倒な女めと。埃片方に立つて大聲上げ。ヤアく娘。夜光の珠を

受取りしか。何してをるぞとつかうどに。嗚呼ははる聲の響きてや。心靜かに

寶塔を。携へ出づるゆふしだが。跡に續いて女之助。出づるや否や尊敬し。奈奈

くも寶塔の。内に籠めたる御玉は。闇を照らす事。日輪よりも明かなる故。地夜

光の珠とツン名付けたり。ス程貴き御寶を。軽々しく受取られし。ゆふしで殿

は仕合せと挨拶すれば。皆はお前のお世話故と。表面なる互の辭儀。新洞左衛門

笑聲に入り。ホラ、娘。寶を異議なく受取つたか。出来したく。しかし其檢

分の役。改める爲拜禮せん。何れも共に拜まれよと。いふに隣

ひ女之助。橋立共に頭を下げて。フはつとばかりに敬ひ居る。地色ゆふしで

心に信を取り。どなたも玉の御威徳。拜み給へと

寶塔を。開き見すればコハいかに。眞黒くろと黒

玉の。曇をつくれし如くにて。是はとばかりゆ

ふして親子。女之助も橋立も。共に呆れし顔付きにてツン暫し。詞もなかりしが。

新洞怒つて。ヤア大盗人の監物太郎。改めずんば煙物を持たして歸す工よな。

地イデ寶藏へ踏込み掴んで来んと。駈行く向ふをさつと明け。内より飛出る監物

太郎。暫をくろめの白々しく。コリヤ受取らば。玉の光を失ふといひしは妄

コリヤ新洞。先達ていふ如く不淨の女が



ぞ。其女に詮議がかゝつたそこ退けと。

地打つて變りし詮議の裏釘。いがみかゝつて橋立が。コレゆふしで殿。身に覚えあるならば。有様に白状あれ。地色一間の内で不義がましい。みだりな事はなかりしかと。まさ／＼しげに問掛けられ。

何と言譯ゆふしだが。すべきやうなく髪にさす。白羽の矢をば抜くとはや。矢の根を咽に突立つる。是はと驚く人々より

半狂亂の新洞左衛門。抱きかゝへてコリヤ娘。わたりや何故に自害する。言譯なくばない様の。思案もあらうに情ない。

地大事の娘を殺すかと。さしにも猛き武士の。子故の闇に目も眩みエテどうど。坐りて泣居たり。地今を限りのゆふしで

が。涙片手にナウ恥かしや。自らは此館へ来るよりも。さるお人をば思ひ初め。情の道に迷へども。大事の役目と心の駒。地繋ぎ留めしを情なや。御内室の

饗應酒。あれなる御酒を飲むよりも。不思議や

五臟に泌み渡り。大事を忘れ何のその。地儘よの上にはり持たされ。ついで下紐を解きそめて。是非なく身をば。マ穢せしぞや。地色言譯ならぬ淫奔を。詮議に逢うて恥かいて。斯くなり行くは神の

罰。神明念りの縮矢に。射殺さるゝと覺悟して。死ぬる心の悲しさを。推量してと泣く涙。袖に餘れば血に染みて、見る目も。

いと哀れなり。地色様子

を聞いて新洞左衛門。すつくと立つて走寄り。娘が言ひし御酒徳利兩手に攜ん

ひし御酒徳利兩手に攜ん



で。ヤアラ心得ず。尤も若氣と言ひながら。左程亂るゝ娘にあらず。仔細は此中顯さんと。縁の框に打付けく。打割る中より守宮のつがひ。現れ出づればしつかと捕へ。扱こそく。唐土張華が博物志に。交合の守宮を引分け。酒に浸して其氣を飲ませば。忽ち女の心亂すと書き現はす。其理を知つて娘に飲ませ。性根を亂したづらませ。身が穢れた故光失せしと。科をこつちへ塗付けて。質物渡す下拵へ。巧んだり拵へたり。憎さも憎し不義の相手。是へ出せずだく。試して胸を晴らさんと。三寸短板見抜きし兩眼。睨みつけてぞッ話寄する。ちつとも隠せず女之助。其不義の相手は某。御存分と押直る。ヲヲよき覺悟觀念と。振上ぐる劍の陰。ナウ是待つてとゆしでふが。苦しむ體に氣も弱り。心も折れて詮方も。泣くより



外の事ぞなき。苦しき中にも親の顔。じろく〜と見ておいとしゃ。親一人子一人の。私に別るゝお前の心。悲しい上にお腹も立たう。フシさりながら。他たとへ守宮の業ならずと。ちよつと見るから思ひすめ。心が先へ穢れたもの。帯紐解かずと御寶の。光失せいで何とせう。假の契りも二世の縁。枕交はせば我が殿

御。聲は子といふ世の習慣。私が死んだ跡にても。形見と思ひ懸に。おいとしがつて下さんせ。おぬし様も父上を。親と思つて折ふしの。訪ひ音信を頼みます。親に先立つ我が心。推量して可愛やと。思つて一言未來まで。夫婦と言つて下されとッしやくり。上げたる哀れさを。見見るに身に沁む橋立が。せめての事と介抱し。萬事を胸で諳めて。詞に出ねど心には。さぞ自らが憎からう。言譯するにもしられぬ品。皆これ前世の約束と。思ひ詰め給はれと。歎けば共に女之助。是迄盡くせし悪性の。止めとなつた今の悲しみ。未來は扱おき後々万劫。契りは變らじ夫婦ぞと。いふ聲耳に經陀羅尼。物も得いはず嬉しげに。合はず両手が暇乞ひあへなく息は絶えにけり。わつと泣き出す新洞左衛門地鞠踏んで。へエ、しなしたり情なや。わが片意地



な心から。一生夫は持たさぬと。言うたを誠と思ひ詰め。あへない最期を遂げけるよ。未來で夫婦と悦べども。悲しむ親が此世からそれが見えるかたはけ者。思情なの我が身や。不便な娘の最期やと。

しやくり上げたる一徹涙。堤も切れて大川に。泥の淵なす如くなり。地色共に衰れと人々の歎きの内に監物太郎。かの寶塔を目通りに据ゑ。女之助を引直し。汝この如く。光を失ひし不義の相手。討つて渡す覺悟せよ。サア新洞受取られよといふ聲に。涙拂うてすつくと立ち。サア人そばへすな其手は喰はぬ。義理立てせば助けうと思ふかいつかなく。眼前娘の敵人手は頼まず。我が手にかけて眞二つ。恨みを晴らすそこ退けと。飛びかゝつて拔打ちに。はつしと斬つたは件の名玉。是はとばかり人々は呆れて。フシ詞もなかりしが。地色女之助聲をかけ。手が廻りしか新洞左衛門。せかれずともサア首と。差付くれども目に懸けず。切りし玉引掴み。おのれ陰陽和合を嫌ひ。よう光失うて。娘に自害させたなあ。我が子の敵思ひ知つたか。加藤の家

の名玉は。目利の目からは悉皆藍玉。持つて歸り主君に見せ。恥顯はして腹癒てくれん。必ず跡で其玉は寶物などと争ふな。眞誠の質があるならば。石動や御臺に持たせ。早く此家を捨てさせよと。地いひ教へたる詞の裏。表は、忿り心には。せめて娘が手向ともなれよとかける情をば。袖に隠して立歸る。地色折よしと御臺若君。駆出で給へば女之助。新洞が詞のはし御兩所の身の上氣遣ひ。幸ひ我が君高野に御座あるとの風聞。それを力にお供せん。地いさせ給へと勤め立て。伴ひ出づれば監物太郎サア待て弟。御生れついて好色者。いまだお若き御臺所。預けやる事覺束なしと。地いふよりやがて守宮を引裂き滴る血を。腕へ塗付けは見給へ見者人。守宮は不義を勤むれども。其血は却つて不義顯はず。唐土秦の始皇三千人の宮女に。不義あら

んかと疑ひ深く残らず臂に是を塗る。不義ある者は忽ちに落ちて跡なくなる例。さるによつて守宮といふ字を。宮女を守るといふ心で。みやもりと書傳ふ。地我が朝にては萬葉集。脱ぐ沓の重なる事のかさならば。守宮のしるし甲斐やなからん。沓重なりてさへ印は落ちると詠みし歌。地まして三代相恩の。お主に對して不忠不義。天命いかで言はせも立てサア、出来した行けと一言が。兄の情のフシ。銭や。地色御臺若君立別れ高野の。山の峯にある。我が夫諸共歸り來んと。連ね給ひし。フシ言の葉も。それはまつとし待つ迄は。お名残り惜しやと橋立が。駈寄るを押隔て。互にさらば。おさらばの。聲を力に忘れ草伴ひ。館を出で給ふ國に。思ひや残らん

第四 道行越後獅子

三下り馬蹄踊り来て。是の大門。眺むればエ
イソレ七里。大もん花でかゞやく。ナホス
花を見捨てて。憂き事に。フシ憂きを重ぬ
る。玉鉉や。繁氏の御臺所。石動丸の御
手を引き女之助がお供にて。君は高野に
ましますと。ホシそれを力の忍草。笠に
はあらぬ越後獅子オウ習はぬ。わざと太
鼓笛吹くや追風に帆を上げて。國を出船
の日和もよく。フシオウりはるくへ紀の路。
加太の浦。あがる朝日に。摺れ違ひ。爰
より徒歩の草鞋がけ。沖の鷗におき別れ
小オウ誰か。松江と聞くからに。辻占よ
しといそく傳ひ。長尾跡に心は残らねど
引戻さるゝ砂道は歩めどはかの。フシ行櫛
む。げにや世にある身なりせば。名所古
跡も訪ふべきに今は耳にも目にも見ぬ。
小家がちなる軒の端。煙賑ふ峯々に霧立
ちのぼる。絶間よりほころび出づる山々
は。野飼の牛の口を執る草刈り童の月代

に。似たちやないかと高笑ひ似たは化け
たか。狐島。フシ睫毛濡らせる袖の露。松
に残りし。嵐と共に。オウ野邊の。草葉も
枯れん。いつも變らぬ冬景色。落葉も
霜に埋。命もれて木の斬蔭の淋しきは。
在所離れて北嶋の。渡り急ぎし舟呼ばひ
川の流れて水鳥の。羽を伸す音に驚き
て。人目防ぎと舞ひ奏で。ヌエ櫻木踊の拍
子とり。命懸き子三寸頭櫻木を。枝にふき分
け門に立て。門の。光で。庭も輝くさ。
くら木。北山の櫻の様なる。殿がな女郎が
など。ナホス歌ふ聲さへへ和歌の浦。フシ爰
は寡婦のかたをなみ。お茶は摘まねど都
に紛ふ。所の名さへフシ宇治と呼ぶ。月を
慕ふか雨を招くか露盤にあらで懸造。お
宿くゝと招かれて。まだ日は高い先が急
ぐと言捨てゝハズミ逃げた。のかはの親世
音歩みながらに遙拜し。齡を祈る松島
や。千代に八千代に。さゞれ岩出を跡に

なし振返。音聲を、りり見る。フシ故里は。あれ
かあそこかあの邊かと。空にしろししの甲
斐もなく亂れ。亂れ亂るゝ白雲の。風に
誘はれ。半鐘の聲。フシはや入相に。程は
長田の里續き。誓ひを頼む紛川寺恵みも
深き法の友。胸に木札の順禮も。願ふは
二世の道知るべ。我々とてもあの世ま
で。伴ふ主の御在所。尋ね三谷を過ぎ行
けば。高野も近し我君に。二寸頭やがて
おほつと聞くや嬉しさに。道を急いでし
やなら。ナホスと紀の川。上にぞ。三重
へ月影に。月光を添ふる法の道高野山の繁
昌に。つれて憂る麓の里學文路の宿の賑
はしさ。都方より参詣に鄙の道者も打交
り。泊りせりあふ旅籠屋の。フシ内騒がし
き黄昏過ぎ。同じ浮世に。人忍ぶ。地色身
はならはしよ旅の空筑前の三人も。宵よ
り爰にかりの宿笠も草鞋もとくくと。
寝られぬまゝに御臺所。石動丸の御手を

引き障子開いて次の間へ。フシ立出で給へば。地女之助跡に引添ひ歩み出で。詞

や人の盛衰は定め難しと申せども。繁氏卿御在國ましますば。錦の褥に御身を添へ。隙間の風も防がんに新く淺ましき旅泊の轉寝。いたはしさよと頭を下ぐれば。共に萎るゝ涙を隠し。我々親子が苦

勞より若い其方が心遣ひ。永の旅路を主なればこそ忝いぞや嬉しいぞや。死んでも忘れはしませぬと。フシの給ふ顔の艶やかさ。地旅疲れでさへアノ御器量。さて美しやと思ふよりふつと目の付く煩惱心。例の特病の好色が穂に現はれて是はしたり。改まつたおつしやり様。忠義といふは付けたり。永々の道中をお前様のお供して。何の苦勞に存じましょ。我が君のごさると風聞する。高野山へはもう四五里。地明日は儘かにお逢ひなさる。さぞ明晩はしつぽりと。久々の溜り

水人目堤の切れ口を。フシ御用心遊ばせと仕懸けて見たる間業。おのが病に配劑の

加減は常の如くなり。マアあの人のつがもない。たとへ夫に逢うたりとも。御出家の御身なれば其楽しみは切れてある。只歎くのは國の騒動。地大内を亡し

此若を世に立てる御相談。一先づ國へお供して立歸りたい心の願ひ。もし其上の御得心還俗でもなされたら。ハテ其時とはばかりにて袂こぼるゝ醫には。フシとど思ひや増さるらん。地媚く詞を付け込むしれ者。じり／＼と傍に寄り。成程おつしやればそんなもの。しかし一旦浮世を捨て。御出家なされた御主人。何程におつしやるともよもや還俗はなされま

するに。ほんにわし等がお前の様な女房

を持つたなら戴いてゐる合點。何と談合なされぬかと。言ひしなづつと立寄つて後より抱き締め。何と／＼と頬指を。フシ髪ですこそうたてけれ。地御臺は呆れて詞なく振放し飛退きて。コリヤ女之助。そちは氣ばし遣うたか。あんまりで

物が言はれぬ。石動丸も聞いてゐるぞよ。國許を出づる時。監物太郎が念に念。誓ひを立てゝ守宮の血。臂にまで塗つたぢやないか。地まだ廿日にもなるならす。それ程の大事を忘れ。人でなしめ畜生めと。やり込め給へば思案して。コリヤ色とりでは行くまいと氣相變へてから笑ひ。いかに國を出づる時はさう思うて出たれども。一月足らず夜も晝も。テモよい器量又あるまいと見る度になる。思ひの種。増さりこそすれ忘れず。も言ほか／＼と堪へ／＼て言出す今夜。地

命がけで惚れた戀。服とあればお二人を
手にかけて拙者も自害。オツトあれば
いつ迄もこつてりのちんくサア。地手
短かにお返事と差添を抜放し。大悪無道
に一心が坐り切つたる眼つき。天魔の
魅入りと知られたり。地色石動君は効氣に何
の頭是も涙聲。死ないで叶はぬ事ならば
父様に巡り逢ひ。其後死なうそれ迄は母
様もお詫言。女之助も堪忍しやと。あど
なき詫びも武士氣質。御臺は泣くにも泣
かれぬ仕儀燃え立つ胸を押鎮め。命に
かけて自らをそれ程思ふが誠なら。兎や
角もなるべきが。せめて殿様に巡り逢
ふまで。了簡して待つてたもと。の給へ
ばならぬく。是まで騙すが皆其手。
そんなあまぢやくには嵌らぬ我等。ハ
テ厭なれば息子殿から殺してのける。子
がかはゆくは合點して夜の更けぬ内はめ
いてしまを。イヤそれでも。それでもと

は厭な氣か。サアくくと地座敷の
内をあなた。こなたと付け廻せば。御臺
は足の踏所なく若君をかき抱き。コレ座
相しやんなア、危ないくと。慄ひく
奥の間へ。引外して逃入り給ふを。
どうでも遁さじ返事はと。續いて一間に
駈入りしが。ごとと一聲釣鐘の音凄まじ
く鳴響き。驚かされて見し夢は跡なく。
覺めて。三重へ旅姿。慈尊院の縁ばなに
主従三人笠傾け。前後も知らず臥し給ふ
猶も續いて寺々の。鐘鳴る音に女之助。
むつくと起きて月影に。四邊を見廻し
爰は何處ぢや慈尊院。扱は今は夢であ
つたか。ハツア有難や嬉しやく。ホン
ニ夢ぢや忝しと。地天を拜し地を拜し。
悦び片方に座を占めて。エ、我ながら情
なき根性かな。明暮御臺を見る度にさり
とは惜しいお姿。お主ならずは口説き落
し我が妻にせんものと。思ひ初むるは日

に幾度。我が身で我が身に意見を加へ。
勿體ない恐しいと。又思ひ替へて心を改
め。忠義を盡くすと思へども生れ付いて
の色好み。淫犯の病ひを顯はし夢の内
とはいひながら。主君に對して不義を言
ひかけ。剩へ討ち奉らんとしたりしは。
よつく武運に盡きたるかと思ふ暫し涙に
くれけるが。飛退さつて頭を下げ。
御臺様若君様。夢の間の不義不届。眞
平御免下されと。恐れ入つての。三拜
九拜。親子の人は正體なく寝入りし額
に汗たらく。魔はれ給ふに走寄り。申
し。申しと揺り起せば。二人ながら起上
がり。顔を詠めてヤア。其方はまだ寢ず
かと。齒の根も合はず面色變り。若君
を押圍ひ立返さ給へば南無三寶。夢とは
いへど通ぜしよと。胸に磐石押込む如
く。切なき心を押鎮め。お疲れも出で
しにや。魔はれ給ふに驚きて目を覺まし

候と。地言ひくろめても氣は濟まず。フシ案じ煩ひ居る所へ。地色群り來る人音に何事やらんと女之助。立上つて眼を配り。

たとへ道行く旅人たりとも見咎められては御爲惡し。御兩所は笠深々田舎道者の臥したる體。拙者も暫し隠れんと。兎角しつらひ片陰へ。フシ忍びて。様子を窺ひゐる。地色程なく來る大勢は學文路の宿の百姓ども。中にも庄屋が智慧あり顔。

コレ皆の衆。此所の殿様。大内之助義弘様がノヨ。遙々の海山を越え直に登つて繪圖をみんな一枚づつ渡してノヨ。此繪圖に合うた者を。縛つて來いと云付けてござらよ。三十許りなよい女性とノヨ。十ばかりは美しいちつべいとノヨ。また三十餘りな色とり男と。どうやら人の女房を。息子共に盗んでかけおなどと見えるぞや。どうでもむつかしい尋ね者。見付けたら金になりますらよ。共

吟味に精出さしやれ。誰が縛つても庄屋だけ。褒美はおれと半分わけノヨ。地断つて置いたぞと。いふを聞兼ねしやばり

出る。所でちつと理窟者。男を磨く玉屋の與次。朱鞘の大だら落差。立ちまたかつてコレ爰な庄屋殿。拔け作でも身内が慾ぢやの。近年は代官によい人がわせた故。所も騒がず物靜かでよかつたに。何やら又いひ出して代官所へ呼付け廻り。

ちつとばかりの褒美であるが。澤山さうに三人まで縛つて來いとはうまい殿様。騙されておぬく殿が。括たら褒美を取り。ハ、ハ、どこへ褒美。和御寮の様なうまい和郎に。括られる人間があるものかいの。役に立たぬ口叩かずとサア。地早う去にませうと。先に立つをコリヤ待て玉屋。われが今の言分を。この智慧者が勘辨するに。褒美が少なけりや。見付けても取逃がす思案ぢやな。さつきの言付

けをどう聞いたぞ。庇ひ立はならぬぞよ。お尋ね者を助けたら。助けたる者の首ころりノヨ。是も断つて置いたぞよ。ナア、いづれも去にがけに慈尊院の境内を探して去のらぢやあるまいか。もしも屈んで居よつたらノヨ。よつ程な拾ひ物と。地大勢引連れうそくと。二人の寢姿見付け出し。コリヤ、爰に何やら居るぞ。地く、れくと立ちかゝるを。

女之助飛んで出で。何奴なれば旅人を脅やかす。地近寄つたら撫斬りときつば廻せど事ともせず。爰に居る大金を。掴んで去ぬると取巻くを。地ヤ次等は人賣りか盜賊か。地目に物見せんと刀の電光。無二無三に斬りかくなれば。フシ風に蜘蛛の子散らすが如く。地色逃散りながら口々に。地ヤイ、玉屋。算用の合うた三人。

見ぬ顔して助けるかと。地庄屋の一言聞捨て難く抜合はせて支へたり。地さては

おのは盗賊の張本か。地一人も餘さじと
女之助は根限り。火水になつて斬結ぶ。死
物狂ひにさしもの大勢。與次はもとより
構はぬ氣の。人が逃ぐれば共逃げに。アッ逃
けて跡なくなりけり。地長追ひせば悪
しかりなんと。刀を納めて二人を呼出
し。かく行先を盗賊に圍まれては叶ひ難
し。此間に御供していづくへなりとも立
忍び。夜明けてお山へ登らんと諫め申せ
ば尤もと。御臺若君かひひしく。帯引
締めて草鞋の紐。結ぶ間遅しと三人は。
跡をも見ずして。三へ雲隠れ。星の逢夜
と結び合ふ。地學文路の宿の玉屋の與次
内には水が月影の。ませども宿へ歸らぬ
は心許な日暮れ過ぎ。妻のお母は埒
明の夜なべを捨てて。圍爐裏焚く。自由自
在な我が世帯鑑子に沸る一煎じ。女夫の
仲のこつちりの出端も妹脊の。花香か
や。地色娘かどたは門の戸をさすと居眠る

宵まどひ。コリヤそこなお船頭。モウ
船を漕出すか。ほんにやれく嗜めよ。
連合ひ與次殿は。遂にお代官の顔も見ぬ
人。地それに今日呼びに来て今に戻られ
す。おれよりマア其方が案じる筈何故と
言や。地アノ與次殿とは生さぬ親子。今
にでも戻られ。眠たさうな顔見せて心の
義理が立つものか。腰所でもして置け
と。地叱るも親身聞くもおろく。地母
様こらへて下さんせ。昨夜の大師講の持
越でとろくが来ました。地デエ腰所を
しておこと。小廻りすればラ、それそ
れ。地もう初夜過ぎ。地追付けであらう腰
間掃いて寝所しや。枕はおれが直すぞと
二つ並びやを言兼ねて。娘頼まぬ心意
氣。いらいぬ遠慮と見えにける。地色此家
を力に女之助御臺若君後に圍ひ。息をば
かりに駈來り門の戸忙しく打叩く。お母
は驚き駈出でしが。待てよ夫の足音なら

すと。地何者なれば夜に入つてきたま
しやと咎むれば。いや苦しからず。我々
は旅の者。足弱二人召連れ盗賊に出逢
ひ。やうく切抜け。是まで參りしな
り。地三人の命助けると思召し御圍ひ下
されなば。世に有難く候はんと。餘儀な
くいふに厭ともいはれず。地主の夫は留
守なれども。左程の難儀見捨てるもお笑
止。地暫し此方へお入りあれと門の戸あ
くれば三人とも。命の御恩と追従し。地
内へ通れば。地色女房が心をつけて表を締
め。イザ先づあれへと圍爐裏の陰。互に
見合す顔と顔。地ヤお前は。繁氏卿の御
臺所。牧の御方様ではないか。さう言ふ
そなたはお母ぢやないか。ナニ以前の女
房かと。地女之助も吃驚のでもと。さて
もが一時に手を打ち。地共に呆れしが。
地さるにても此お姿。地何故これ迄逢々
とお越しありやと尋ねれば御臺は涙を浮

めながら。連合暴徒氏卿御通世遊ばし。國は大内に憫まされ。命危く逃げのび。わが夫高野にましますと。色人の噂を力にて此所まで来りしと。語り給へば共に目を靡り。いかい御苦勞遊ばすの。若君様の御成人何か思へば。一昔。變る浮世の有様と。憂きを涙に語り合ふ。

色女之助あたりを見。其方と離別せし折から。かだと言ひし水兒を添へしが。見事育て上げたるか無事で居るか尋ねの詞。齒に衣させず。コレいはれぬ昔をお尋ね。過りなき身に暇の状。是非なく故郷へ歸り年よつた母様。乳呑子抱へどうして暮す當もなく。途方に暮れし折から。此家の主も以前は武士。尾羽打枯らした互の落目。共過ぎにするならば。母様ぐるめ養うてやろとある。色二度の夫と思へども親の爲子の爲に。此家へ嫁入つた其年に母様を見送り。

娘も成人したけれど何の此方に逢はさうぞ。言出しても下さるなとけんと言はれて女之助。むつとはすれど宿を借る。ッ無心に詞も無かりける。若君は大人しく只何事も堪忍し。今夜爰に泊めてたもと涙ぐんだる御仰せ。コハ勿體なきお詞。見苦しけれど一間もありいざおれへ往てお休みと。申し上ぐれば御臺所。主が戻り給ふならよきに頼むと打萎れ。石動君の御手を取り。ッしをく立つて入り給ふ。色女之助はつきほなく共に奥へと立上るを。お母はやがて押しとどめ。御兩所はお主筋好んでもお宿を申す。其許には宿付はず。何處へなりともお越しあれと。差止められて重なる業腹。ヤなめ過ぎた女め。御大切なる二方を預け某いづくへ行くべきぞ。お主ばかりの誼を思ひ。夫の誼は思はぬかと嵩にかゝれば。サア其誼ぢやに依つ

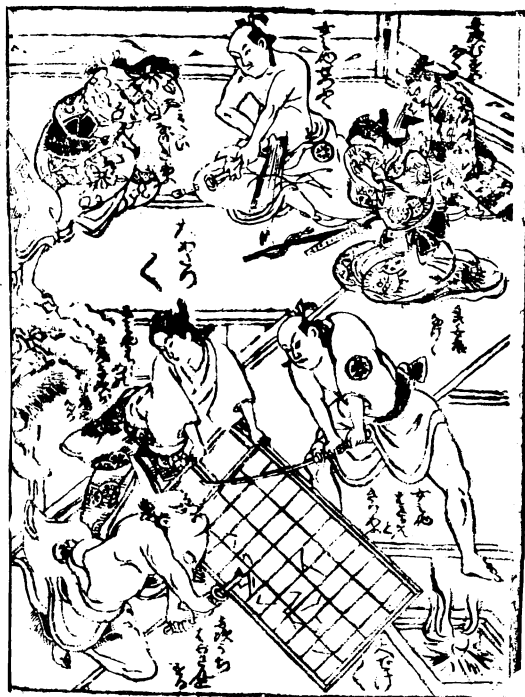
て猶ならぬ。ソリヤなげに。さればいの。今自らには玉屋の與次とて夫あり。其留守の間へ以前の連合。泊めてくれとあつた故。泊めましたとはどの口で。どう言はれうぞ無遠慮人まだ其許は昔の道樂直らぬの。お二方は此お母が命にかけて預つた。氣遣ひせずと宿なくば軒の下でも一宿あれ。あた自墮落なと引立て。有無を言はせず門の戸を。明けて表へ突出し。理窟で締める錠は押すに。押されぬ心の錠。幼馴染の合鍵も工合違うて海老の腰屈めながらに軒の下。暫しと宿る。ッばかりなり。程なく歸る玉屋與次道のどまくれ夜を更かし。闇を照らす禿頭門の柱でこつつりこ。あ痛し爰ぢやと打叩く。お母は待兼ね走り。あけるや否やテモけうとい。今迄どこに何してと。おきまりなる。悴氣口。今夜はお上の御用筋。夜が更

けても權柄。しやつとも言ふなと圍爐裏の火を。差しくべる内表より女之助が聲として。一旦の理に逼り軒に一宿せども。寒風烈しく身も冷え渡る。御亭主もお歸りと見受けたり。一夜の宿と乞ひにける。與次は聞き耳。ありや何ぢや。何いふのぢや。イヤあれは最前旅人が盜賊に出逢ひ。難儀に及ぶとありし故。引くに引かれず足弱二人は泊められたども。お前が留守故男子御は遠慮して。外に寢さして置きましたと。語ればハアテそれは大事な事。これ旅の人。外に寢てなら寒からう。こち入られい。圍爐裏にあたつて寢られいと。地だらうと詞も情は嬉しく。門の戸あけて小腰を屈め。御免なれとてもの事。少し焚火の御報謝と。何心なく圍爐裏の端燃える明りで顔見合せ。ヤア。わりや最前の侍かと。俄かに變る與次が氣相。女

之助も抜放し。さういふ汝は件の盜賊。出逢うた所が百年目と。斬りかくれば抜合せ。爰を最後と斬合ふ有様。お坊は夢か現にも様子は知らずヤレ待つて。暫しといへど聞入れず。詮方つきて茶の水を引すくうて燃える火に。ざんぶとかくれればつたりと。消えて聞の夜二人はハツト。猶豫しながら。聲かけ合ひ。おのれ盜賊そこ引くな。侍逃げなと駒の目鷹の目。とめるお坊も暗がりて。すべき様なき折からに。又も圍爐裏がくわつと燃え。そこにをるか互の切先。ナホス南無三寶と杓の水ばつとかくればふつと消え。目先手先も知ればこそ。盜賊め。待めと。聲を力の減多討ち。燃えると斬合ひ。消えると探り千變。萬化の戦に暫し時。をぞ三へ移しける。際取る内に圍爐裏の明り。七轉八倒お坊はあわて。一間の障子引きは

づし斬合ふ中へ打ちかぶせ。身を捨て、鏗と乗りかゝれば。互の太刀先抑へられ。思はずどつかと居坐つて。ほつと思つぐばかりなり。音に驚き御臺石動手燭携へ駈出で給へば。お坊はせき上げは待つてたべお二人。わけて我が夫與次殿。此方の事は所でも。人も恐るゝ男一匹。盜賊よ追割よと。名を立てられて切先勝負。若しもの事があつた時妻子までの面汚し。何故さもしい名は取り給ふ。様子を開かねば爰放さぬ。サア仔細はとせく詞を。尤もぢや女ども。全く某盜みはせず。其侍が同道の足弱二人はお尋ね者。則ち此國の領主。筑紫より大内義弘殿到着あつて。此繪圖に合ひし者當國へ來りし由。擲取つて渡せとの仰せ。證據は爰に懐より。出して見せたは紛ひもなき。御臺所と若君の。お姿書きし寫繪に。人々ハツト胸つかへ肝を。冷

するばかりなり。おおつは常から頼もし
 き夫の心をよく見抜き。コレ其繪のお二
 人。いづくいかなる御方と。知つて此方
 捕へるのか。イヤそりや知らぬ。人違ひ
 でも大事なし。捕へて来いと仰せ。身
 にかゝらねば念押しして。問ふ間もなく歸
 りがけ。慈尊院で出くはし見通しならぬ
 庄屋の一言。其意地持つて此場の出逢
 ひ。構ふな退け〜そ放せと。勿退
 けるをイ、ヤ放さぬ。斯うなるからは
 何を隠さう。これなるお侍は自らが前
 の夫桑原女之助。お供しられた二方は。其
 繪に違はず筑紫大名。加藤左衛門繁氏様
 の御臺若君。わしが以前のお主ぢや
 と。聞くより與次ははつと飛退き。左様
 と存ぜず無禮の段。眞平御免と氣折の平
 伏。心許さぬ女之助反打ちかけ。我等も昔は家來
 筋などと。古手を以つて油断させ。大内



が方へ注進する下心か卑怯者。立上つ
 て勝負せよと勢ひかゝれば。暫くと
 り給ふな。其言譯見する物あり。暫くと
 押有め。箆管より刀一腰取出し目通り
 に据ゑ。いづれもお見知りある刀。立寄
 つて見給へといふに人々氣を付けて。見
 れば目貫は菊流し牡丹に獅子の國鏢は。
 紛ひもなき夫の差替。げに〜繁氏卿の

お刀。細こりやどうして其方が所持したる仔細はと。地不思議立つれば。不審は尤も。もと其は播州浪人。尾羽打枯し都方へ。奉公稼ぎに上る折から。八幡山崎の間狐川の渡しにて。さる浪人と口論仕出し。刺違へんと致せし所。其場へ繁氏卿通り合はされ。雙方一分立てよと。御差替一腰宛下し置かれ。地色命助かるのみか外聞の腰を塞ぎ。それより武士奉公のあり付きなく。此國の士民となつては候へども。御恩は忘れぬ昔氣質。命の親の繁氏卿。その御臺若君と聞き。地何と手向ひ申すべき。御疑ひを晴らされ御禮代同然に。思召し下されよと。餘儀なくいふに御臺は嬉しく。げに其事は御物語ありし事。扱は其時お刀を貰うたは其方よの。遺つたる人は御通世。御跡慕ふ我々が。力となつて今一度。繁氏様に逢はせてたも。頼み少なき世の中や



と。フシ卿ち給へば。お氣遣ひ遊ばすな。天地の間に御座あるなら尋ね逢はせ參らせんと。奥底もなき心底を見込んで猶も女之助。頼もしき御一言。

とても事に御誓言で承りたし。其上頼む事ありと。いふに居直り金打し。諸天善神は愚か。佛意をかけ二言なしと。地色聞いて安堵の胸を据ゑ。何思ひけん

どつかと坐し。差添抜いて我とわが。腹にぐつと突出つる。人々は狂氣かと驚き騒げばア、騒ぎ給ふな方々。思ひがけなき最期故。御驚きは尤も。何を隠さう某は。生れ付いて好色深く。兄監物太郎が疑ひを晴らさん爲。守宮の血を腕に塗り。誓ひを立て、國を出で。心で嗜めども。情なや宵の夢。わりなくも御臺へ戀慕。聞入れなきを手にかけて殺さうと迄したりしが。慈尊院の時知らず。鐘の響きに夢さめて。いつにない御臺には。我姿を見て御恐れ南無三寶。夢とはいへど通ぜしか。はや切腹とは思へども。我なくなりては御兩所を。守り奉る人なきと。さあらぬ體にて是迄來り。今與次殿の心底見込み。頼み置いて相果つる。申し若君様。是なる與次殿を力となされ。父様のお行方尋ね。目出度う御對面遊ばせや。何の因果で此様

に。不所存には生れしぞと。我と我身の悔み泣き、ッ見る目も。共に哀れなり。も與次はわざと涙を隠し。夢は五臟の煩ひ。なぜ本心を改め御先途を見届けぬ。切腹とは臆甲斐なしと恥しむればイヤナウ。本心を改めても。夢となくるになぐられぬ。仔細は腕に塗つた證。心の迷ひで守宮の血が。これ此如く消えたるは。罰か報いか天命か。兄監物へ言譯の。種を失ひ是非なくも。斯くは計ひ。ッ申せしぞや。よし證が落ちぬと。最早御臺は虎の子を。供に運るゝと思召し。片時も心安かるまじ。せめての冥加に御主人の。お心休めにする切腹。これ迄盡くせし忠節を。無にして死ぬる跡の儀を。頼むゝといふ聲も。弱り果てたる息づかひ。も與次は哀れの袂を絞り。せめて最期の思ひ出に。娘かどたに逢はさんと。呼びに立つを女房が涙な

からに引きとめ。定めて様子を聞いても居ませう。駈出る筈が駈出ぬは。前の親を慕ふかと。思はれまいと思ふから。其氣な娘を呼出して。泣くも泣かれぬ苦をさそより。やつぱり小陰で存分に。泣かしてやつて下されと。子に擬へたる我涙。保ちかねて思はずも。エエわつと。ッばかりに泣叫ぶ。も御臺も共に御涙。惚れる身よりも惚れらるゝ此身のつらさ悲しさを。推量しやとしやくり上げ。歎かせ給ふ御聲が。冥途の形見南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と差添を。抜くが此世の暇乞ひ。ッ消えて果敢なくなりけり。もハツトばかりに人々の緋り泣入る折こそあれ。遙かに聞ゆる人馬の聲。すは事こそと與次は突立ち。ッコリヤコリヤ女房。泣いて居る所でなし。察する所討手の聲と覺えたり。思ふ存分働いて随間を見てお供せん。先づそれ迄は

一間へ入れ。聲すな音すな油断すな。行
けく急げと、追ひやりく、七の
岡まで尻引からげ。好む所の段平を抜
駢して待つ所へ。馬上に跨がる大内義
弘。松明提灯星の如く。手の者引具しど
つと駢寄せ。ヤヤ、此家に繁氏が御
豪悍石動。圍ひ置いたる條遠見の注進。
急いで繩かけ渡せばよし。異議に及ぶ
とあばら家に乗潰してくれんすと。くわ
つと睨めたる兩眼は。海に入り日の射す
如く。フあたり眩見えにけり。内には
わざと音もせず。すは風くらつて逃
げたるか。踏込めやつと呼ばはる聲。
捕つたくと捕手の役人。われ劣らじと
込み入るを。得たりと與次は。眞向梨割
車斬り。さしもの大勢たまり得ず。一引
きさつと引いたりける。大内は馬上に
齒がみをなし。所の代官駒形一學。あ
れ蹴散らせと下知すれば。承ると駢來

る侍早繩たぐつて大聲上げ。ややく
與次。いか程に働くとも。斯く十重廿重
に取巻いては叶はぬ。異議に及ぶと
飛道具。いかにと罵つたり。流石
の與次も飛道具に心おかれし折からに。
一間の内よりコレナウ御亭主。とても遁
れぬ我々。急ぎ繩かけ身の難儀。遁れて
たもと障子を明け。出づるを見れば妻の
お埒。娘かどたを石動に仕立て、出づる
主思ひ。それと悟れど恩愛に。心後れて
手を仕へ。ホ、其御覺悟はさる事な
れども。一旦圍ひし某が。むさく渡す
無念さを。御推量下されよと夫婦別れ
の涙をば。目に浮ぶればお埒も萎れ。
自らは覺悟の前。只いとほしきは此石
動。あらぬ形の男髪。不便にござると
共泣きに。泣きしをれしが。與次はつつ
立ち是々役人。お尋ねの兩人。繩かけ
てお渡し申す。受取られよといふ聲に。

駒形一學内に入り隙間あらせぬ氣配り目
配り。是非なく繩をかける内御豪は駢出
で。ナウ悲しや妾こそと言ふ口押さへて
立身で隠し。親子を引立て引渡す。表に
扣へし大内は大聲。コリヤ、一學。
渡し置いたる繪圖あるべし。引合せて受
取れと。遁れがたなき鶴の一聲。驚を
鳥と争うても。争ひにくき姿繪を。明り
へ出して引擴げ。見るも一生懸命。遁れ
ぬ所と與次は身構へ。つく、詠めて駒
形一學。繁氏が御豪悍繪圖の通りに遠
ひなしと。表へ答へる慥かの訴へ。與
次は夢かと念に念。其詞に相違ないか。
跡で違變召されなど。打つたる釘の
詞を返し。ヤヤ入らざる馬鹿念。駒形
一學春秀が受取つたに相違はない。よく
繩かけて渡したよ。當座の褒美に一腰く
れると。差添抜いて提灯の明りへ出し
たは繁氏の狐川にて情の一腰。ヤヤこり

や我夫のお差替。扱は拙者と一時に。御恩を受けた待かと。いふ聲高いをシイしつと。押さへて消して引立つる。昔忘れぬ武士や見送る夫も妻子をば。恩に替へたる涙の雫。身に降りかゝる御臺の歎き。餘所に見捨てのお婿は忠義。かどたは實の父に迄。おくれの髪まげの男鬚まげ。今日は石動明日よりは。寒の川原の石の塔。十づつ十は百歳と。祝ひ飾りし命をば。

捨ててに行身と捨てにやる。思ひは同じ思ひぞと。泣いては送り送られて。屢所の歩みと歩み兼ね。行きては戻り戻りては泣く音もつらき明烏あきう。かはいくくの。聲名残り引かれて。こそは別れ行く

陰徳あれば陽報あり賢き教へ眼前。御臺所石動丸玉屋の與次が介抱にて。築氏卿の御在所尋ね求める高野山。小石交

第五

りの細道を爪先上りたどくと。辿り給ふぞ。フシせつなけれ。御痛はしや。母君は。習はぬ旅の疲れにて御心地例ならず。歩み悩みて休らひ給ひ。ナウ與次殿。誠や人の習ひにて榮え衰へ。浮き沈みありとは豫て知りながら。餘所の事よと思ひしに今身の上に思ひ知る。是につけてもいとほしきは内方お婿と娘のかどた。我々が身に代り敵の中に憂き苦勞。定めて憂目に逢ふやらんと案じ過しの御涙。共に萎るゝ詞を嗜み。ハア、譯もない御歎き。彼等が御身に代りしは。お主大事と一途の忠義。さは言へ駒形一學は。情を知つたる侍命には氣遣ひなし。斯様な小事に御心を痛め給ふが御病氣の障り。必ずお案じなされるゝなと。口にはいへど心には。胸迄のぼす涙を抑へ。申し若君様。親子御一所にお供して尋ね廻り。殿様に逢はせませんと

存ぜしに。この御病氣では道抄も參らず。殊に女人禁制の御山。寺中へは行かれぬ御身。お前はかり先へ駈抜け。築氏卿を尋ね給へ。私はそろくと御臺様や疾くくと動いば。今日ぞ戀しき父上に尋ね逢ふよと嬉しくて。御心はせかるれどやうく二歳の時別れ。それから逢ひ見ぬ父様なればお顔さへ知らぬもの。何を便りに尋ね逢はん殊には母様の御病氣見捨てゝ一人わしはいや。三人ながら一所にと。フシ離れ難なき御風情。御臺所は目を開き。ワ、道理々々さりながら。其方が側を離れぬとて此病が治るにあらず。片時も早く父様を尋ね女人堂迄お供しや。殿様の顔見るならば者姿扁鵲が薬にも。百倍ましたる薬となり本復するに。フシ疑ひなし。お顔は知らずとお名を名乗り。加藤左衛門繁氏の今

道心は何處にと。出家に逢はよ尋ねよ。湯水を取つての介抱より是に増したる孝行なしと。息もたよわき御仰せ。幼心に聞分けて。父様のお顔を見て。御本復さへある事なら成程私が先へ参り。お在所を尋ねましょ。跡からそろそろ與次を伴ひ。女人堂迄。お出であれと。しをく濡るゝ笠と。杖。取上げて立ち給ふを。顔つくぐと打守り。そんなら其方はもう行きやるか。東西も東も知らぬ身を。手放してやる氣遣ひさ。跡で案じはいかならん父様に廻り逢うたらば。随分早う便りをしや。暫しの別れといひながら人の命は電光石火。打つ石の火より果敢なき鬚。母が顔もよう見ておきや。そなたの顔も詠めんと。物が知らせし暇乞ひ。傍で聞く身の胸苦し。與次は詞も泣く涙。目をしばたき。あちら向く。若君何の頭はもな

く。然らば母様後程と立出で給ふ。レ山道を餘所見して躓くな。怪我ばしすなと氣を付けて見交はし。別れたる。是が此世の名残とは後にぞ思ひ知られたり。與次は御跡見送りて涙を拭ひ。サア是から御臺様。坂の間を負ひ参らせん。いざさせ給へといふ所へ。女房お埒娘のかどた。息をばかりに駈來るを見るより喫驚。ヤア女房か。ナウ娘のかどたかと。御臺も共に御驚き浮木の龜の對面と。悦び給へば溜息つき。不思議に命助かりしが御運の末。折角親子が心を碎きし。お身替りも賢者と。新洞左衛門に言ひさがされ。いとほしや駒形一學殿。直ぐに其場で御切腹。我々も危き所をやうく切抜け逃げたれども。追手の來ぞは知れた事。早う立退く御思案と。いふに驚く與次が面色。出来したくしかし。此如く御大病たやすく

遁れ逃げ難し。若君は早や御山へ我也娘を引連れて。御臺様を肩にかけ女人堂に預け置き。立歸つて防ぐべし。其間を汝踏みとどまり。暫らく追手を支へよと。差したる一腰投出せば。所より一寸も追來る敵を山へは登さぬ所より一寸も追來る敵を山へは登さぬ氣遣ひあるなど。男勝り。脇差取つて脇袂めば。よくせよ抜かるな女房と。御臺所を負ひ参らせ。娘が手を引き逸散にオコリ山深。へくこそ急ぎける。あなた方さへ落したら心にかゝる事なしと。獨言する折こそあれ。麓より來る大勢は大内之助が雜人ばら。おつ取巻いて聲々に。ヤア賢御臺の喰はせ者逃ぐるとして逃がさうか。誠の御臺石動はいつくへ落した。有様にほさき出せ。僞ると肝先へ太刀魚がお見舞と。歯き騒げどちつとも臆せず。ム、親子御の行方が

聞きたいか。それは天竺てんたくの四日市。大俄たいがいながら上つてござれ。テモ咽のどのえらい女め。雄おとこ叩き殺せと拔連れく斬つてかゝればまつかせと。同じく此方こなたも拔放し。雄おとこどれ御自慢の太刀魚を。箔摺はくすり刺す細だら料理。切味を賞翫しょうくわんと。雄おとこ多數を相手に縦横じゆうげう機塵きじん火花を散らして。三翼さんよく八戦はつせんひけり。女なれども。雄おとこ忠義の一念飛鳥ひつてうの如く駈廻り。なぐり立てたる太刀先に。コハ敵たかじと難人なんにんども。はふく逃げて失せにけり。雄おとこ何れヤレ此隙このひまがよい引き時。雄おとこ長居は恐れと逃ぐるも追はず。御臺所と夫の跡。ナホス慕ねがひてこそは。三翼さんよくへ行く空の。雲間に近き。八葉はつはの。峯に紫雲むらさきぐもの靉靆あざむらさきし。高野山と聞えしは三面に山連やまづらなり。源一水げんいちすいにして萬水東ばんすいとうに流れ。大師だいし二大にだいに道を習ひ。開き。し始めし露地ろじとかや。林はやし清きよ地ぢいたはしや石動丸いしどうまる。かゝる難所なんじょをたどくと。心も空あかに浮草うきくさの。根さしの父



は顔知らず。名のみ知るべに。尋ね行て通る。不動坂。踏みも通はぬ。丸木橋たまきばしく。オホ袖おほそでの涙なみだぞ。フシ哀あはれれなる。ナホスなほす名残り情なごりじやうも横吹よこふききの。嵐あらしに木の葉。散果さんくわ思おもひ高野たかのの。谷川やがわや弓手ゆみでは岩間いわま。馬手うまてはてい。エ心細道こころこまぢつく杖つゑは。アリおとりつ登のぼ天野あまのの山風やまかぜ。峯たかねに煙けむりの。一結び。見上げりつ。行先ゆきさきを。問へど岩根いわねの松まつかげに

フン暫し。休らひ給ひける。ニヤシ百年の榮
 耀は風の前の燈火。悟れば我も佛なり。
 ナホス煩悩菩提と。フシ諦めて。唯色加藤左
 衛門尉繁氏入道。刈萱道心と名を改め。
 佛法修行の山坂を。辿るも、フシ後世の便
 りかや。唯石動親子の機縁にや思はず傍
 に走寄り。申し御出家様。唯この御山に
 今道心のましまさば。教へてたべとあり
 ければ。コハ興がる少人かな。九百九
 十の寺々。毎日入り来る初發心。昨日刺
 つたも今道心。一昨日刺つたも今道心左
 様に尋ね給ひては知れ難し。俗の時の名
 を言うて。尋ねられよと身の上の。オヤ
 事とも。知らず。フン仰せある。唯色されば
 とよ尋ねるは自らが父上。二つの年別れ
 し故お顔も見知らず。元は筑紫松浦黨。
 加藤左衛門繁氏様と。言ふより扱は我が
 子かと。取組らんとしたりしが待て暫
 し。佛前にて誓ひを立てたる恩愛妹背。

爰ぞと思ひよそくしく。ムウ年も行
 かぬに遙々と。暮ひ来る志。誠の父が
 聞かれなば嗔嬉しくも懐かしく。飛付く
 程に思されんさりながら。此山の掟に
 孝行と。いひ教ゆれば。イヤナウ我



が國は大内といふ者攻惱し。母様諸共この山の麓まで参りしが。悲しき事は母様が道の疲れに煩うて。命の内に只一目父に逢はせてくれよとお歎き。情と思つて御在所。御存知ならば教へて。目に持つ涙はらくと。抑へ兼ねたる有様に。我こそと名乗つて聞かそか。いや

勿體ない師の御坊の戒め。と言うてはるばる來たものを。知らず顔見ぬ顔が。どうなるものぞ不便やと。胸にせきくる血の涙。こたへ兼ねて思はずも。エエわつと。ばかりに泣き給ふ。石動丸は目賢く左程に歎き給ふのは。もし父上ではあらざるや。早く名乗りて給はれと。締り歎かせ給ふにぞ。亂れ心の折ふしに。後の方の岩陰より。師の阿闍梨の聲として。ヤアアア。誓ひを忘れ給ふなど。藥思入無爲の。誓ひを忘れ給ふなど。制せられて苳萱は。起上つて振返り。ハ

ア、さうぢや。迷うたり誤つたり。今此三界悉は吾子。いづれを我が子と思ふべき。師の手前も面目なしと。衣の袖を打拂ひ。ハレ小さかき少人かな。

哀れを共に見捨てねば我を父よと縛る事。穢らはしや忌はしや。お事が尋ねる繁氏入道。此山におはせしかども。諸國修行に出で給ひ今は行方も知れざるぞ。急ぎ下山し母親の。病氣の介抱召されよと。エつれなく言へどこやらに。残る詞の彌勝り。なになに父上は行方も知れず。此山におはせぬとや。ナウ情なや浅ましや。我はともあれ母様が。焦れ死をなされうかと。それはつかりが悲しうて。跡へ戻るも戻られず。似た人にてもあるならば。逢はせてたべと搦口説く心ぞ。フシ思ひやられたり。共に張裂く。思ひをば押隠して懐より。包みし藥取出し。コレは師の御坊一萬座の

護摩を焚き。調合ありし妙藥。母御に用ひ看病あれ。來た道筋は難所に草臥足では叶ふまじ。こちらへ行けば花坂とて平地も同じ事。馬もあり鶴籠もありいざ。立つて行かれよと。心強くも引立てられ。石動丸は泣くも藥とあるを力にて押戴き。是非もなみだの泣別れ。迷ひ道をば。そこ爰と教へながらも苳萱は。心許なさ思はずも。引かるゝ縁の友綱や見えつ。隠れつ。慕ひ行く。思をばかりに玉屋の與次御臺所を負ひ奉り。娘を引連れ女人堂迄來りしが。跡先眺め片陰におろし參らせ。お心持は如何ぞと申し上げれば御臺所。苦しき體を押隠し。自ら事は思はずとも。お坪を救うてたもるのが。我が爲の良藥と。宣ふ詞に跡先を。思ひ廻して猶豫せしが。いかさま女の手業に追手を防が

せ。見捨て置くも心許なし。仰せに

任せ引返し申すべし。御コリヤ〜かど
た。大事の〜御臺様ぢやぞ。お傍を離
れず御介抱申せ。お腰でも撫らしてこ
さりませ。つい往て参ろと口軽く。フシ飛
ぶが如くに引返す。御臺は重る病ひの
床。涙ながらにナウかどた。日向ふの道
より石動が。歸る姿は見えざるか。戀
しの我が子や。なつかしの我が夫やと。
彼方を見ては打倒れ。此方を見ては。伏
轉び最期も近き御有様。かどたは悲しく
コレ御臺様。父様や母様の。歸らしや
る迄どうぞマア。死なずに居て下さり
ませとエテあどなき詞かいしよなき。フシ
娘の肩に。介抱せられ。自らも石動が
便り聞く迄〜と。氣の張弓も弦切れ
て。死ぬる今端にフシなりしぞや。異
次夫婦が歸られなば。石動事をくれぐ
も。頼んで死んだと言うてたべ。せめて
最期に夫や子の。顔見る事が叶はずば。

聲など聞いて死にたいと。御山の方を打
眺め。眺めても口説いても。逢はれぬ事
かとしやくり上げ。泣く音も辛やい。き
切れの露の命の果敢なくも。フシ消えて跡
なくなり給ふ。かどたはあわてナウ是
申し。申しといへど其甲斐も。なくも泣
かれず立つたり居たり。母様呼びに走ら
うか。父様はなせ遅いと。坂を駆けおり
聲を上げ。父様なう母様なう。御臺様
が死なしやつた。コレなう戻つて下さ
れと。聲をばかりの叫び泣き。フシことわ
り。せめて哀れなり。頃は臘月雪空
に。餌食乏しき山鴉。ナメカはい。可愛を
引替へて。フシ死骸にたかれば。ナウ悲
しやと駈寄つて。あなたを追へば。こな
たから集りかゝれば詮方も。小石を拾ひ
打つ確そこよ。爰よと駈廻り身體も息も
絶える程。父を呼び鳥を追ひ。追ひめぐ
れども小娘の。フシ泣く音もつらき折から
に。石動丸は徒歩眺かくを見るより走
付き。群る鴉を切拂ひ。あへなき死骸を
捲起し。ナウ情ない母様。斯くなり給ふ
事ならば何しにお傍を離るべき。父上に
は得違はず。お前に別れて私は。何とな
らうと思召す。これ結構なお薬を。御
出家様に貰ひました。是をあがつて健に
なり。たつた一言石動かと。物喰ううて
たべ起きてたべと。藥取出し嘔みこな
し。甲斐なき母に吹込んで。ナウ母様母
様と。起立て抱きかゝへエテ前後。不覺
に泣き給ふ。かゝる哀れを遠目から。
見るより思はず如萱道心。走寄りしが是
迄さへ。立てし誓ひを今更に。無下には
せじと目を押拭ひ。コレ〜少人。悲
しきは道理ながら。いたく歎くは佛の迷
ひ。い〜回向し参らせんと。口に
唱名心には我を慕うて遙々。海山越
えて来りしに。妻子かともえ言はずに。

餘所に扱ふ我が心。草葉の蔭からさぞ恨

みん。赦してくれよ我が妻と。念誦に交

る胸の内。シとどめ兼ねさせ給ひけり。

然る所へ與次夫婦駈戻り。ヤア御臺

様は御最期かと驚き騒げば。女房が刈

萱を一目見て。なうお久しや。繁氏様と

いふに石動。なに此お方が父様か。な

つかしや戀しやと縋り給へば衣の袖。打

拂ひく。逃げんとし給ふ後より。レ待

ち給へ我が君と聲をかけて監物太

郎。大内之助に大綱かけ息をばかりに駈

來り。勅命受けて一戦に討ち勝ち生捕

つて參つたり。如何計ひ申さんと。ふ

より與次が躍り出で。何かはなし急

いで首と。既に斯うよと見えたる所へ。

暫しくと新洞左衛門。飛鳥の如く飛來

り。謀叛人とはいひながら。未だ旗を

上げたにあらず。一家中の歎きを思召

し。一命助け給はれと平伏すれば刈萱

道心。助けるとも殺すとも私には計ひ難

し。都へ行きて奏聞遂げ。命乞ひして得

さすべし。それを我が子石動が。筑紫

へ送る轎と。ヤア仰せによつて引立つ

る大悪無道の強敵も。我が神國の御注連

繩。治まる御代の例とて。悪人亡び國安

全。民も豊に萬々歳。千代を祝ひし筆の

跡長くも。語り傳へたり